
魔法少女リリカルなのは † 黒き魔爪 †

グレイアル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 十 黒き魔爪 十

【Nコード】

N 4 3 1 5 M

【作者名】

グレイアル

【あらすじ】

車に轢かれそうな爺さんを助けたが、代わりに死んでしまった主人公。

眼が覚めると、助けたはずの爺さんがいて神様と言い、転生させてくれるらしいが……。【リリカルなのは】の世界に転生した主人公のテンプレでチートでご都合主義なお話です。さらに作者は完全な初心者。それでもいいと思ったら読んでください。

プロローグ（前書き）

はじめまして。グレイアルです。初心者なので拙く遅筆で駄文な可能性が多々あるかもしれませんが、精一杯頑張って生きたいと思っています。

プロローグ

眼を覚ますと、真っ白な空間で横になっていた。

「知らない天」 「おお、やっと目覚めたか」・・・」

一度は言ってみたい言葉ランキング上位の言葉だったのに・・・
O
r
z

「∴そろそろ、いいかのお？」

さっきと同じ声色が聞こえた。

辺りを見回すが何処にも居ない。幻聴か？

「こっちじゃ」

「ほえ？」

上から声が聞こえ向いてみると、頭に光る輪を乗せ空中を浮いてる爺さんがいた。

・・・ん、なんか見覚えがあるような？

「・・・・・・・・ああ！車に轢かれそうになってた爺さん！？」

思い出した！！車に轢かれそうな爺さんを助けようとして、

突き飛ばしたまではよかったんだが、俺が逃げ切れなくて・・・！！？

「え、あれ！？俺って轢かれたんじゃない？！」

バツ！っと自分の体を調べるが、特に異常は見当たらなかった。

「よかったあ。俺、生きт「お主は死んだぞい」：デスヨネー」

わかってたんだ、爺さんが空中に浮いてる時点で。

という事は、この爺さんってもしかして神様？

「いかにも、わしが神じゃよ」

oh、心を読んだんですね、分かりま（ry

「まあ、そんなことはよいのじゃ。お主、さっきは助かったぞい」

「いやその、突き飛ばしてすみませんでした？」

感謝されたことがあまりなかったので、逆に謝ってしまった。

「ほほほ、気にせんでよいぞい。お礼にお主を転生させてやろう」

「なん・・・だと!？」

転生だと? 二次創作なんかでテンプレのあれか!?

「そ、その、本当に転生させてくれるんですか？」

「うむ、特典として能力を1つだけだが授けよう」

mjk! ? これでカツ 「ただし、行く世界と能力は自由に決めれんぞ」

な、なんだってええええええええ!!!

神は死んだorz

「勝手に殺すでない！……まあよい。決定方法はこれじゃ」

「えっと、穴の開いた箱？」

神の爺さんが出したのは、一箇所だけ大きな穴の開いた箱だった。

それも2つだ。

「まあ、クジじゃな。1つが転生する世界、もう1つが能力が書いてある紙が

入っておる。これをお主に1回ずつ引いてもらうぞい」

「おおう、なんという運任せ」

「落ち込まなくとも良いぞい。悪いことは書いてない（はず）じやからな」

おい！今、ボソツとはずって言わなかったか！？

神はS「それは、もうよい」……っち。

「ほれ、早く引いてくれい」

「分かった、逝くぞ！」ツズボ、ツバ！

勢いよく転生先の箱から1枚を抜き出した。俺の転生先は……。

「ふむ【リリカルなのは】の世界じゃな」

おおおお、魔法少女か！好きなアニメの1つだ。

此処に来て運が廻ってきたかもしれん。

「よし、次来い！」

「おお、元気がでてきたのお。ほれ、能力用の箱じゃ」 ツズボ、ツバ！

能力の箱から1枚抜き出す。出来ればアンリミテッド・ブレイドワークス【無限の剣製】のような、カッコイイ能力来い！

頼むから、ネタな能力だけは勘弁してくれよ！？

「ほほう、珍しいのを引いたのう。」

「え？」

その声に、引いた紙を確認する。紙に書いてあった能力は……。

「うむ、ゲーム『ロストチャイルド』から【アーミット・ケルベ
ルス】の

能力に決定じゃな。」

「・・・マテ」

ロストチャイルドってどんだけマイナーネタ「わしは結構好きじゃ
ぞ？」心を読むな！

そして神様、あんた何気に1〇禁ゲームやってんじゃねーよ!?

あれって、今じゃ1000円でお釣りがある店もあったんだよ？

確かに能力はカッコイイが、釈然としない・・・近々格ゲーとして
出るらしいけどさ。

・・・タライが落ちてくる魔法よりマシか? いや、あれはあれで凄
いけど・・・。

「ふむ、決まったようじゃな。では、送るぞい」

「へあ?」

爺さんが指を振ると、俺は浮遊感を覚えた。

下を見ると、大きな穴が開いていた……え、なんというテンプレ?

「のあああああああああ!!!???.?」

あつと言う間に落ちて行く俺。そんな俺を見届けた爺さんという
と。

「あれ？」

とかほざいてるんですけど!?

そして俺は意識を失った。

プロローグ（後書き）

主人公の名前は少しの間、でてきません。

短くてマイナーネタかもしれませんが、どうかお付き合い下さい。

01話 「いきなりフラグ乱立ってどうよ!?!」 (前書き)

いきなり独自設定があります。苦手な方は気をつけてください。

01話 「いきなりフラグ乱立ってどうよ!？」

神様の爺さんに穴に落とされ意識を失った。

意識が覚醒していき、眼を開けるとそこは・・・

「ゴポゴポ（ここは・・・何処?）」

温かい水の中でした。

魔法少女リリカルなのは―黒き魔爪― 始まります。

01話 「いきなりフラグ乱立ってどうよ!？」

「ゴポゴポ（・・・此処は?）」

辺りを見回すと、俺は色々な機械が繋がれているガラスポットの中

に居るようだ。

時の庭園でアリシアの入っていた感じのを想像してくれるとわかりやすいかも？

〈おはようございます、マスター〉

「ゴボボボ（のああ!?!）」

急に頭の中に声が響き、驚きの声をあげてしまった。

まあ実際、ゴボボボとしか聞こえないのは仕方ないことだ。

しかし、これは念話というやつか？

ってことは……さっきの声を思い浮かべて……頭の中で語りかけると。

〈……もしかして念話か？〉

〈Yes, Master. 私はマスター専用アーミットデバイス
【アイリッシュユ】〉

なるほど。魔法世界だから能力をデバイスとして仕様変更してくれたのか。

神様も粹なことをしてくれるな。これに免じて穴に落としたことは、忘れてやるか。

〈オーケー、アイリッシュだな。宜しく頼むぞ〉

〈Yes, Master. 全ては貴方の為に〉

なんとも甲斐甲斐しいデバイスは優良物件だ。

声の質から女性型の人格っぽいな。よくやった神様！！

〈お前は何処にいるんだ？〉

〈マスターの体内^{ナカ}にいます〉

・・・ナニソレ、コワイ・・・。

一瞬、メリーさんのものを連想した俺は悪くないはずだ。

まあ、携帯しなくてもいいといった利点もあるし便利といえば便利か？

とりあえず、それは横に置いてつと。

〈アイリッシュ、ここから出ることは出来るか？〉

〈・・・出ることは可能です。ですが拒否させていただきます〉

〈・・・どうということだ?〉

いきなり反抗期なんですか?褒めて損したぞ!?

〈現在、この世界は崩壊しつつあります。そのため転移を推奨します〉

〈・・・〉

ほほう、この世界はH O ☆ U ☆ K A ☆ I ☆しつつあるのか・・・
・・・?

「ゴババババババ! (なんだってええええええ!!!?)」

ちよ、おま!?! 転生直後でいきなり大ピンチって!?

おい神様! 「あれ?」 ってこういうことか!?

って、そんなこと考えてる場合じゃなかった!

落ち着け、C O O になるんだ。スゝハゝスゝハゝ・・・よし。

〈アイリツシュ、転移するぞ。どうしたらいい?〉

〈お任せを。マスターは行きたい場所を思い浮かべてください〉

〈そうか、任せた。行き先は第97管理外世界の惑星【地球】だ〉

〈第97管理外世界、惑星【地球】座標確認。転移します〉

アイリツシュの言葉と共に、深い緑色の魔方陣が展開し、視界を染め上げた。

あまりの眩しさに、眼を閉じる。

『マスター、転移完了しました。』

アイリツシュが転移完了を知らせると、俺は眼を開けた。

眼前には、広大な森林が広がっていた。夜明け時なのか陽が昇り始めている。

・・・いや、どこだよここ?」

『富士の樹海です』

樹海！？ってか心読んだよね、今！？

『マスター、声にでていましたよ？』

・・・なるほど、気をつけよう。ってか寒！？今、何℃だ！？

『気温4℃です。マスター、服を着ることを推奨します』

「アイリッシュ、何を言ってるんだ。俺は服を着て・・・ないじゃんか！？」

なななんとお、着てないだとお！？

いくら誰もいない樹海の中だからって、は、恥ずかしすぎるぞ！？

『マスター、これをどうぞ』

そうやって目の前に出現したのはボディースーツのような白い服とフード付きの外套だった。

よく見るとこの服、ゲームでヒロインが最初に来ていた服とデザインが似ていた。

腕の丈は手首まで、足は膝より上辺りまでで、深い緑色の縁取りとラインが入っており胸部で十字を切ったような横のラインと縦にファスナーが付いていた。

てか、どこから出した、アイリッシュ……。ああ、デバイスだから格納領域か。

などと考えながら手早く着ていく。

「へえ、思ったよりも暖かいな。・・・よし、現状確認したいんだけどいいか？」

一息ついたので、自分について確認したい。
何故、あんなところに居たのか等、知りたいことは沢山ある。

『Yes, Master. 何からお話しましょうか？』

「そうだな、まず俺についてだ。なんであんな場所に俺は居たんだ？」

『了解。【プロジェクトレイリア】の実験体としてあの場所で産み出されたからです』

「【プロジェクトレイリア】？なんだそりゃ？」

産み出された・・・ねえ。まあ、転生憑依ってことか。

それにしてもレイリアって言えば、ヒロイン達の種族名みたいなものだよな？

こっちだとそういう設定に変更なのかな？

『【プロジェクトレイリア】は擬似リンカーコアを造るために発足された計画です。そのため多くの人間、クローン体が人体実験の失敗により破棄されていきました。ところが約1年程前にあるクローン体が突然変異を起こし、擬似リンカーコア、仮称【ウテルスジエム】を発現させました。そのクローン体、【type M-7T】それがマスターです』

おい、まで。擬似リンカーコアって拙くないか？

下手しなくても、管理局の脳みそに知れたら即刻捕まえに来るぞ？

なにこの死亡フラグorz

『顔色が優れませんが大丈夫ですか、マスター？』

「あ、ああ大丈夫だ。次はあの世界について教えてくれ」

とりあえずこの問題は後で考えよう。

まだ他にも死亡フラグがありかねないが、全て聞いてから対策を考えよう。

『第187管理外世界【エセリアル】発達した科学により発展していましたが、行き過ぎた研究の失敗により死の世界と化しマスターを残し全員死亡。最後には次元震のような反応を起こし先ほど崩壊しました。幸いにして近隣に次元世界がなかった為、被害はあの世界だけで済んでいます』

「……………そうか」

『気になさらないでください、マスターのせいで滅んだのではないのですから』

「ああ、ありがとうアイリツシュ」

やっぱりこいつはいい娘だ。俺のことを気遣ってくれる。

ありがとう、アイリツシュ。GJ、神様！！

『では、ウテルスジェムについて説明します。ウテルスジェムは高純度の魔力【エーテル】をエネルギーに活動する第2の心臓です。その為、エーテルが体内から枯渇すればマスターの身体にどんな悪影響が出るかわかりません。ですから無茶だけはしないでくださいね。』

「わかった、肝に銘じておく」

『ありがとうございます・・・続けます。マスターはレアスキル【エーテル変換】により、周囲の魔力を集め通常、魔導師が圧縮魔力をリンカーコアで生成するようにエーテルを生成します。これによりエーテルの枯渇の可能性は限りなく低いですが、ゼロという訳ではありませんからね。』

念を押してくるが、ゲームだとエーテル無くなったら消滅するんだっけ？

・・・気をつけよう、洒落にならんし。また死亡フラグかよトホホ・・・orz

「・・・アイリッシュ、お前についても教えてくれ。聞いた事のないタイプのデバイスみたいだし」

『了解。正式名称は【試作型アーミットデバイス・アイリッシュ】。マスターの生成するエーテルには通常のデバイスでは耐久性が追いつきませんでした。』

そこで、エーテルの魔力量に対応できるデバイスが設計されました。それがアーミットデバイスです。』

「通常のデバイスとの差異は、なにがあるんだ？」

『基本的な部分は変わりませんがバリアジャケットの形態は固定されています。エーテルの循環率を高めることで、身体能力を上昇させる設計です固定兵装として左腕に【永遠に続く慟哭】というア

ーティファクトを装備し戦闘を行うことが可能です。』

アーティファクトって、エーテル結晶で出来たアーミットの武器だったな・・・。

状況によって変化させられる武器ってのはありがたいけど、扱いきれるかな？

『バリアジャケット、アーティファクト共にエーテルで成型されているため、多少の衝撃や魔法ではビクともしません。又、エーテルを使用していることで極めて高い攻撃性能をも秘めています』

なるほど。防御性能が高いのはありがたいな。・・・結構チートだな。

でも力加減に気をつけないとなあ・・・後で特訓しよっと。

海鳴市壊滅したら、洒落にならないもん・・・（汗

「・・・だいたいこんなもんでいいかな？」

『いえ、後1つだけ伝えることがあります』

「それって・・・ん、なんか体がムズムズするな」

痒いとかじゃなくて、くすぐったい感じがする。なんだ、これ？

『もう2時間経ってしまいましたか・・・』

え？それどういうことですか、アイリツシュさん？とっても嫌な予感がするんですが・・・。

『マスターはウテルスジェム発現の副作用として女性因子を多く含んでいます。そのため、1日のうち午前0時から2時までの2時間だけ男性に戻られますが、残りの時間は女性体に変化してしまいます。先ほど、男性体に戻って2時間が経過しましたので・・・』

アイリツシュが言い終ることなく、俺の体の周りを緑色の光が覆っていた。

同時に胸部に重みを感じ下を向く俺。

そこには、男にあるべきものではない膨らみが2つあった。・・・推定C〜Dカップ近くあるな（マテ

「つてことは・・・」

更に下、局部に手を宛がう。そこには男としてなくてはならないはずの大事なモノがなかった・・・orz

なんてことだ。一応男に戻れるらしいけど2時間だけって・・・せめて12時間とか、半分にしてほしかったよトホホ。

神様、やっぱり許さん。サーチ&デストロイ確定じゃ、ボケエ!!!

・ ・ ・ ・ ・

うん、今日はもう寝よう。これはきつと悪い夢なんだ。

「起きたら元に戻るさ・・・おやすみ」 Z Z Z Z Z Z

『マスター!? 現実逃避してないで起きてください! マスタアアアアア!?!』

アイリッシュが何か言ってるけど、俺には聞こえない。

聞こえないんだからね!? (爆

01話 「いきなりフラグ乱立ってどうよ!？」 (後書き)

なぜ富士の樹海かは、突っ込まないでください><

次話で主人公の名前がでてきます

02話 「気にしすぎは体に悪い思った」(前書き)

とても短いです。とりあえず漸く、主人公の名前が出てきます

02話 「気にしすぎは体に悪い思った」

起きても体は女のままでした。

この世界に神はいな「ちゃんというぞい!?!」い・・・

なにか聞こえたような気がしたが、気のせいだろう。

・・・これからどうしようかあ・・・

魔法少女リリカルなのは――黒き魔爪―― 始まります

02話 「気にしすぎは体に悪い思った」

どうやら不貞寝してから5時間ほど経ったらしい。

空には太陽が昇り、清々しい朝を醸し出している。

落ち込んでいた精神も、寝たことによって大分落ち着いたようだ。

女の身体も、自分の体なので諦めがついた……ことはないが、仕方ないと割り切ることにした。

・・・完全なTSじゃないだけマシなんだ……と思ってないとやっつけられんのだよ。

そうそう、容姿の確認にサーチャー飛ばして俺を映してみたんだ。

髪は青みがかった白髪を肩下の辺りまで伸ばしていて、若干眼つき鋭いが綺麗な緑色の眼。

そしてメリハリのある身体つきをしていた。前にも言ったようにC～D位。

ぶっちゃけゲームのヒロインのEND時の容姿と【ほぼ】同じ容姿だ。

どこが違うかは、詮索してはいけない。画面の前の皆、お兄さんとの約束だ！

・・・俺は誰に話してるんだ？

まあ、いい。とりあえず、一番の問題は……

「・・・名前が思いだせん……」

そう、自分の名前が思い出せないのだ。

困ったことに、その辺の記憶がまったくもって浮かんでこない。

あれか？死ぬ前の名前は引き継がないって言う、仕様なのか？

・
・
・
・

仕方ないので新しく考えることにしたんだけど・・・

「・・・思いつかん！」

『・・・胸を張って言うセリフじゃないと思いますが？』

アイリツシュが、呆れたような雰囲気でいらっしやるようだ。

そう言われても、思い浮かばないんだから仕方ないジャマイカ。

「アイリツシュはいい名前、思いつかないか？」

『私ですか？・・・【type M-7T】から【ミナト】というのはどうでしょうか？』

ほほう、【ミナト】か。・・・うん、いいんじゃないね？

漢字で【湊】って書けば元日本人としてもいい感じだし、男でも女

でも問題はないしな。

ってか、デバイスに負けたとかちよつと凹みそうだったのは秘密だ。

「なかなかいいな。んじゃ、苗字は計画名から貰って【湊Ⅱレイリア】ってことで決定な」

『Yes, Master. 登録名【湊Ⅱレイリア】に再設定完了です』

「よし、名前のお礼にアイリツシュにも愛称をつけてやろう。お前の愛称は【^{アイ}藍】だ！」

『・・・それは短くしただけなのでは？』

「ツグハ!？」

^{アイリツシュ}藍の鋭いツツコミが決まった。湊に精神に15のダメージ。湊は倒れた。

おお、湊よ。死んでしまうとは情けな「って、ダメ15で倒れるって、どんだけガラスハートなんだよ、俺!？」

「ほ、ほら。アイリツシュも俺みたいに漢字使った愛称考えたらすぐ浮かんだんだよ!」

『ま、まあ、マスターからのお礼なら、いいんですけどね／／』

あれ、なんかデレた？

おかしい。特別なことなんか一切言っていないんだけど・・・

そうそう、なんで【藍】にしたかって言うと、ゲームでのヒロインの名前が【藍】だからだ！

・・・え、安直？

コマケエコトハ、キニスンナW

あれ、また電波きた？

・ ・ ・ ・ ・

まあ、そんなことがあったんだけど、今何をしているかって？

「一ヒヨクヒヒヒマツハヒユ？ 《食事に関わってるだろ》」

『マスター。口の中に物を入れながら話すのは、行儀が悪いです』

「ツゴクン。悪い、悪い」

サンドイッチとかオニギリをひたすら食べてますがナニカ？

なんか、やたらと食べれるんだから仕方ないジャマイカ

藍曰く、『身体の基になった人物が某騎士王並に大食いだったかららしい。』

え、どこから食料持ってきたかって？

格納領域に決まってるだろう？

・・・使い方がおかしい上に、なんで食べ物入ってるの？

コマケェコトh(ry

そんなことをお昼頃まで続けていた俺達だった。

02話 「気にしすぎは体に悪い思った」(後書き)

前回は比べて、明らかに短い。

申し訳ない思いでいっぱいな作者です。

次回は能力についてと、特訓。

できれば海鳴入りまで書けたらいいなあ、と思っています。

読んでくださった方々

お気に入りしてくれた方々

皆様方に感謝です>< ありがとうございます！

03話 「チートに噴いた俺は悪くない」(前書き)

ついつい連続投稿。

普段からこれくらい書けたらいいんですけどね。

今回は能力について簡単に紹介？

03話 「チートに噴いた俺は悪くない」

お腹いっぱい食べたので満足です。

時は今やお昼過ぎ。太陽も真上に昇っています。

ご飯も食べたし昼寝し『もう食料出しませんよ?』

・・・ゴメンナサイ

魔法少女リリカルなのは――黒き魔爪―― 始まります

03話 「チートに噴いた俺は悪くない」

腹ペコキャラに食事抜きは鬼門なのです。

という訳で真面目に進行したいと思います。

「藍、戦闘訓練をしよう。ぶっつけ本番なんてのは御免だからな」

『了解。始動キーは【コンセプション覚醒召還】です』

「オーケー、いくぞ！」

「『コンセプション覚醒召還！！』」

始動キーを言い放つと、俺の身体を眩い光が覆っていった。

そして、俺の身体に変化が訪れる。

全身を装甲が纏い、左腕に禍々しい爪をもった黒い戦士が誕生した。

『コードネーム戦闘形態【ケルベルス】移行完了』

「おおおお、かっこいい！」

光が納まると、俺の姿がゲームとまったく同じ物に変わっていた。

頭から脚まで黒い装甲が覆い尽し、胸部には青色の結晶体が出現している。

おそらく、この結晶体がデバイスコアに当たるんだろう。

見た目がわからない人は、仮面ライダーダークカブトの左腕が魔物っぽくなったと思ってくれ！

もしくはググッて探してくれ。俺も説明しにくいんだ。

「藍、結界は張れるか？いくら樹海でも森林破壊とか不味いだろうし」

『Y e s , M a s t e r . 封時結界展開！』

周囲が結界の空間に移り変わっていく。

よし、これでいいだろう。

さっそく訓練だ！

「まずは【歩く】っと・・・あれ、動かん？」

本来ならば操縦感覚で動かす設定なので念じてみたんだが、まったく動かない。

ふむ、やっぱりここも変更点があるってことは、普通に身体を動かせば・・・

「おお、自由に動けるぞ！」

やっぱり肉体を動かす設定に変わっていたようだ。

身体感覚を確認しつつ、適当に数分間動いてみたが、違和感は感じなかった。

試しに左腕のアーティファクト【永遠に続く慟哭^{どうこく}】で地面を殴ってみることにした。

「ツハア！」ドガア！

轟音と共に地面が陥没した。

・・・え、あれ？1メートル近く陥没してるんですが！？

『今ので凡そ3割程度の出力です』

藍さん、今なんと言った？

3割程度で殴ってこの威力って、技でもなんでもないよ！？

ナニ、コノチート。

訓練しようと思ってよかった（汗

『リミッター設定は可能です。現在の出力で設定しますか？』

「あ、ああ・・・頼む」

正直言って、リミッターあってよかったと思う。

なかったら相手をプチッって殺っちゃいそうだよorz

そんなこんなで、基本的な動きを確認していった。

一通りの動きを身体に馴染ませ、今度はアーティファクトの確認。

爪をもった左腕【永遠に続く慟哭】がデフォルトだが、これ以外の物も召還可能らしい。

・・・ゲームだと3種類ぐらい使ってたな・・・

というわけで、さっそく原作で使っていたアーティファクトを召還してみよう。

「来い、【トールの鉄槌】！」

『【トールの鉄槌】 召還！』

召還に応じ、左腕に変化が起こる。

手首から肘までが巨大化し、盾のような形に変わり、肘側にはなにかを噴射するノズルのようなものが内蔵されていた。

腕の重量が増し、バランスがとりづらい。

だが、使いこなせばこの重量は脅威だろう。

慎重にバランスを保ちながら走り出し、一本の樹に目標を設定する。

70 m程先にある木は、幹の太さが5 mはある生きた樹だ。

腕にエーテルを循環させ、拳を握る。

するとノズルのような部位から、エーテルの噴射が発生する。

急激な加速と共に身体が浮き上がり、空に向かって回転していく俺。

「このおおお！言うことをおおお聞けえええ！」

強引に体勢を立て直し、目標に向かって突き進む。

そして目前に左足から着地し、右回りに回転しながら拳を叩き込む。

「トール・スマツシュ!!」ドガアアアアア、ツズシイイイイ
イン!!!!

振り切った拳を突き出したままの俺。

そして樹は、殴られた部分を文字通り粉碎され地面に横たわったの
だった。

・・・ナンゾコレ・・・

暫く俺の時間が【ザ・ワールド】だったことをここに記そう。

・
・
・
・
・

【ザ・ワールド】が解けた俺は、次のアーティファクトを召還する
ことにした。

・・・決して現実逃避したわけではない。

ツコホン

「【シャミノの長弓】！」

『【シャミノの長弓】召還!』

左腕が変化していく。

今度は左腕自体が大型の弓へと変貌した。

しっかりと弦が張られ、全長が自分の身長に迫るほどの弓だった。

そしてエーテルの矢を形成し、番える。

射法八節を遵守しながら、矢を引き絞り放つ。

「アルバレスト・スマツシュ!!!」

射出されたエーテルの矢が、空間を切り裂きながら突き進む。

そしてエーテルの矢は、龍の姿へと形を変え、その顎をもつて大地を蹂躪した。
アギト

ズガアアアアアアン!!!!!!

遠方で振動と共に轟音が響き亘った。

矢の飛んだ先は、地面が抉れ、着弾地点と思われる場所は、周囲10mをクレーターへと変えていた。

・・・いや、だからナンゾk（ry

・ ・ ・

次のアーティフ（ry

「ほんぼう【奔放なる双翼】！」

『【奔放なる双翼】 召還！』

今回は、左腕は変化せず、変わりに背中から一対の黒い翼が出現する。

これによって飛行能力を得られるアーティファクトだ。

空中戦が多いこの世界ではとても重宝されるだろう。

翼をはためかせ、空へと舞い上がる。

数分間、自由に飛び回り飛行感覚を養う。

十分に慣れたところで、大きく飛び上がり羽ばたきと共に回転する。

強烈な羽ばたきと回転により、竜巻を発生させ一本の巨木が浮き上がった。

回転を止め、竜巻の中に閉じ込められた巨木へと急速に接近する。

「ヘイムダル・スマッシュ!!」ズシャアアア!

【永遠に続く慟哭】の爪によって巨木はズタズタに引き裂かれ、竜巻に飲まれていった。

・・・もう何も言うまい・・・

・
・
・
・
・

それから3日間。

起床

←

朝食を食べる

←

ひたすら動きの反復や、力加減の訓練、魔法の勉強

←

昼食を食べる

←

ひたすら動きの反復や、力加減の訓練、魔法の勉強

←

夕食を食べる

←

ひたすら動きの反復や、力加減の訓練、魔法の勉強

←

夜食を食べる

←

日付が変わって男に戻り、自分が男だと再確認する

←

就寝

これを3回繰り返した。

それにより、力加減を会得し、体捌きも憶えた。

アーティファクトが無くても空を翔る魔法も会得した。

「よし、海鳴市に向かうぞ」

『Y e s , M a s t e r . 座標【日本・海鳴市】転移開始!』

ここから、俺の原作への介入が始まる（かも）

03話 「チートに噴いた俺は悪くない」 (後書き)

うん、チートすぎるかもしれない。

でも、エクスカリバー【約束された勝利の剣】とかよりきつとチートじゃない!・
・か?

リリカルなのはの人气に泥を塗ることが無いように祈る小心者な作者でした

主人公設定（前書き）

ようやく設定がだせる所まできました＞＜

独自設定がありますので気をつけてください

主人公設定

名前

湊・レイリア

性別

男（女）（1日のうち0時～2時の間だけ男に戻る事ができる）

年齢

外見は17～20歳相当（クローン培養された為。実際には1歳程度）

身長

167cm、 体重..43kg

男性体、女性体共に外見は同じ。違いは何かがあるか無いか

趣味

食事、風呂（温泉）

魔力光

緑（魔力光というよりエーテルの色）ただし、アーティファクトは紅く光る物もある。

容姿

鎖骨辺りまで伸びた青みがかった白い髪。眼の色は緑肌は白く、眼つきが若干鋭い。

ほどよくメリハリのある身体つき。とある部位はC〜D位のサイズ。

元ネタのヒロイン「藍」のEND時と^{ここ重要}ほぼ同じ容姿

レアスキル

【エーテル変換】

周囲の魔力を集積し、高純度魔力【エーテル】に変換する技能。

主人公の生命線を担う大切な技能。

【? ?】

? ? ? ? ? ? ? ?

助けた神様によって転生させてもらった。

元の名前が思い出せず、製造番号と計画名から名前を付けた。

体内には擬似リンカーコア【ウテルスジェム】と専用デバイス【アイリツシュ】を内包している。

【ウテルスジェム】は突然変異で発現したため、詳しく分かっていない。

性別は男だが【ウテルスジェム】の副作用？で女性因子が多く、1日の大半を女性体として行動しなければならない

デバイス設定

試作型アーミットデバイス・アイリツシュ

エーテル対応式デバイス。愛称は【藍】。心臓付近に埋め込まれているひし形の宝石。

普段は体内にあるが覚醒召還時、胸部にコアが出現する。

人格有り。女性型。主人公のサポートを担う従順な性格。

戦闘形態時の名称は【ケルベルス】

起動キーワード コンセプション 【覚醒召還】

バリアジャケット設定

基本色・黒

U字の角が生えたフルフェイスのヘルメット状装甲。

身体の所々に装甲が施され、胸部に青色のデバイスコアが出現する。

左腕は肘から禍々しい装甲を纏い、鋭利な爪指を持つ。

簡単に説明すると仮面ライダーダークカブトの左腕が変わった感じ？

武装《永遠に続く慟哭》

爪指をもつ左腕。数種のアーティファクトに変幻する。

また、腕単体だけの召還も可能。

エーテルを循環させると腕のラインが紅く発光する。

未登場だが必殺技は《ガラム・スマッシュ》

現在変幻可能なアーティファクト

【トールの鉄槌】

左腕を肘から肥大化させ、その圧倒的重量で粉碎する拳型アーティファクト。

バランスがとりづらいが、推進器のような物が後部についており瞬間的な爆発力は絶大。

推進器を利用して一応飛行可能だが扱いが難しい。

エーテルを循環させると腕のラインが紅く発光する。

一撃の重さは破格。

エーテルを循環させると腕のラインが紅く発光する。

必殺技は《トール・スマッシュ》

【シャミノの長弓】

左腕が弓状に変化し、エーテルの矢を放つことが可能な弓型アーティファクト。

最大出力で射ると、エーテルの矢が龍を模って顎を開く。

エーテルの矢は紅く発光する。

遠距離武器として重宝。

必殺技は《アルバレスト・スマッシュ》

【奔放なる双翼】

背中に翼が生え、飛行を可能とする黒い翼型アーティファクト。

強烈な羽ばたきと回転により、竜巻を発生させることも可能。

移動手段として使えるので、使用頻度は高い。

必殺技は《ヘイムダル・スマッシュ》

独自設定

・ゲーム本編中の描写では、アーミットは装着して「動かす」「操縦する」というニュアンスを用いているが、今作品では、自身で「動く」仕様に設定。

・デバイスとして登場するため、非殺傷攻撃可能という設定。

新情報が入り次第、更新していく予定です。

主人公設定（後書き）

こんな感じに自分は設定しました

ここがおかしい、こうするといい、等ありましたら教えてください

次回からの更新の参考にしたいと思います

それではまた次話でお会いしましょう ^w^

04話 「姉さん、事件です・・・」 (前書き)

どうも、グレイアルです。

ようやく海鳴市に着きました。

頑張っている話に出来るよう努力したいと思います

04話 「姉さん、事件です・・・」

「・・・どうしてこうなった・・・」

海鳴市に転移し、俺は街の散策をしていた。

戸籍もないのでホテルに泊まらない可能性があったため、暫くの拠点となる場所を探していたのだ。

色々と歩き回って見つけた場所、そこには・・・

怖そうなお兄さん方に囲まれて、縛られていた紫色の髪の子がいたんだ・・・

魔法少女リリカルなのは―黒き魔爪― 始まります

04話 「姉さん、事件です・・・」

Side 月村 すずか

油断していた。習い事が早く終わり、迎えの車が車での間に少しだけ出歩いたのがいけなかった。

脇道から現れたワゴン車から複数の男達が出てきて、私を取り押さえたのだ。

口元に布を宛がわれ、急激に意識が遠のいていく。

(・・・お姉・・・ちゃん・・・)

S i d e O u t

S i d e 月村 忍

「なんですって！？すずかが誘拐された！？」

ノエルからの連絡に身体が強張る。ただの誘拐犯ならずかでも何とかなる可能性はある。

だが、もしもこちらの事情を知っている手の者の者の犯行だったとしたら？

「ノエル！すぐに情報を集めなさい！私は街の監視カメラでそれ

らしいのを探すわ!」

「それなのですが、犯人の乗っていた車は白いワゴン車だったそうです。ナンバーは……という情報が現在入っています。」

車のナンバーがわかっているのなら話は早い。監視カメラの映像を切り替え、目標の車を探していく。

「……見つけた! ノエル、5町目にある取り壊し予定のビルに入って行ったわ! 恭也に連絡するから合流して急いで向かって!」

「畏まりました。合流地点については後ほど連絡をお願いいたします。」

そういつてノエルとの通話が終了された。そして急いで私の恋人にして凄腕の剣士に連絡を取る。

「……恭也? 緊急事態なの、急いで今から言う場所に向かって……ええ、お願いするは。」

通話を終了し、ノエルに合流場所を伝える。

机に肘を付き、組んだ手に額を押し当て、祈るような姿勢になる。

(……すずか。無事で居るのよ……。)

S i d e O u t

S i d e 月村 すずか

意識が戻り、ゆっくりと目を開ける。

覚醒した脳が、ゆっくりと思考を始めていく。

自分の現状の確認。私は縄で縛られている。動くことができないのが確認できた。

此処はどこなんだろう？

コンクリートの壁は薄汚れており、床は埃が目立つことから廃ビルといった所だろうか。

「目が覚めたか。」

その言葉を聞き、声のする方に目を向ける。

！？

視線の先に居たのは、私を攫った男達だった。

しかし、その男達はどこか普通の人間とは違う。獣のような眼をし

た野性的な男達。私達に似た人でない者達だ。

「さて、準備も終わったことだ。さっさと済ませるぞ。」

リーダー格の男が指示をだす。

「な、何をする気なんですか!?!」

恐怖感が襲ってくる。怖い・・・どうしよう!?!

「簡単なことだ。お前が壊れていく様子を撮影して、お前の姉に送りつけるだけだ。」

これであの女も財産を明け渡す気に少しはなるだろうさ。」

(そんな!?!・・・誰か、助けて!・・・お姉ちゃん!・・・恭也さん!)

目を閉じ、姉とその恋人に助けを願う。

ガチャ

急にドアの開く音がする。

男の人達も、ドアの方に眼を向ける。

そこには、白い外套を羽織った女性でした。

S i d e O u t

S i d e 湊・レイリア

ドアを開けたら、怖そうなお兄さん方がこっちを睨んでいた。

まさか、海鳴市に来て1日も経たずに、誘拐犯などに出くわすとは思わなかった・・・

「だ、誰だ、お前!？」

どうやら、リーダー格らしいお兄さんが驚きながらも叫んだ。

「えっと、ただの旅行者?です」

「旅行者がこんな廃ビルに来る訳がないだろお!？」

はい、ごもつともです。本当にありg（ry

それにしても、この人達の目が獣っぽい感じなんだけど・・・

それに後ろで縛られてる女の子って原作キャラの【月村　すずか】じゃないか？

・・・夜の一族の関係者さんですね、わかります。

「兄貴。この女、かなり上玉ですよ」

「へっへっへ、余興前にお楽しみといこうぜ？」

「・・・時間がそこまで無いんだ。程ほどにしておけよ」

三下っぽいセリフを溢しながら、こちらを怪しい目で見つめてくる男達。

ブルッ

嫌悪感が襲い、僅かに後ずさってしまった俺は悪くないはずだ。

いくら女の身体だからといっても、男なのだ。

同姓に厭らしい目で見られて気分がいいはずがない。

「いまさら後悔しても遅いぜ！」

掛け声と共に、常人離れした瞬発力で1人の男が向かってきた。

「うわぁ!？」ドガァ!

思わず目を瞑ってしまうと、大きな音が響く。

そして静寂がこの部屋を支配した。

恐る恐る目を開けると、床に男が倒れてい・・・いや、めり込んでいたんだ。

男の身体は、黒い腕によって床に殴り倒されていたのだ。

「あれ？」

「「「「・・・（ポカーン）」「」」」

俺が呆けたような声をあげても、周りの人達はこちらを呆然と眺めていた。

こちら・・・というか、男を倒した黒い腕をもった俺を・・・

「・・・どうしてこうなった・・・」

ここであろうやく、冒頭に戻るのだった。

04話 「姉さん、事件です・・・」 (後書き)

という訳で、原作キャラ初登場は「月村家」の方々でした。

まあ、人外同士の感じでいいかなあつと。

話は変わりますが・・・

僅か4日程でこんな駄文にPV6000、ユニーク1000突破という結果に

改めて「リリカルなのは」の人気を確認しました(汗

こんな駄文にお付き合いいただき、皆様方、本当にありがとうございます
います><

05話 「・・・誰か、助けてください！」（前書き）

どうか1週間以内に更新完了しました＜＜

長さについては、第1話程度があります。

・・・まあ、他の方に比べれば短いと思いますが・・・

それでは、はじまります。

05話 「・・・誰か、助けてください！」

襲われそうになって、体が勝手に反応していたらしい。

無意識に左腕だけアーティファクト【永遠に続く慟哭】を召還して殴っていた。

あ、もちろん非殺傷設定ですよ？

・・・地面に殴りつけた衝撃でめり込んでいるから、関係ないか？

魔法少女リリカルなのは―黒き魔爪― 始まります

05話 「・・・誰か、助けてください！」

Side 月村 すずか

ドアから入ってきた女性に男達の1人が襲いかかった。

——私のせいで無関係な人が巻き込まれてしまった——

そんな、後悔の念が私を襲ったが、もう遅い。

女性は数分もすれば無残な姿に変えられてしまうだろう。

私やお姉ちゃんのように純血種ではなく、獣人の類だろうけれど、ただの人間では適うはずがないのだ。

そのはずだった・・・けれど。

「うわぁ!？」ドガァ!

襲い掛かった男は、女性によって地面に殴りつけられたのだ。

そして殴った女性の左腕は、異形の物へと変貌していた。

(・・・あれは・・・なに?)

私達以上にあの腕は異常なのだ。

獣人達の持つ腕でもあれ程禍々しい腕を持った者はいないだろう。

鋼のように硬い外殻で覆われた腕。

けれど、不安を感じていない自分がいる。

（この人なら、私を助けてくれる）

なんの根拠も無いはずなのに、あの女性を信じている私。

不安は消え、私は意識を手放した。

Side Out

Side 高町 恭也

すずかちゃんが誘拐された。

恋人の忍からの電話を切ると、趣味の盆栽弄りを中断して道場に向かい、小太刀や飛針等を携え、ノエルとの合流地点へ駆け出す。

忍の声が、僅かに震えているのを電話越しに感じた。

よほど、切羽詰った状況なのかもしれない。

・・・おそらく、【夜の一族】に関係しているのだろう。

そんなことを考えながら合流地点に着くと、見慣れた車と傍らに立

つメイド服姿の女性を見つけた。

「ノエル！」

月村家に仕えるメイド【ノエル・エアリヒカイト】

薄紫の髪をショートに纏めた凛々しい雰囲気的女性だ。

月村家全体の管理や、忍の世話を任されている。

「恭也様、すぐに向かいますからお乗りください！」

「ああ！」

すぐさま乗り込むと、車は急発進し、目的地へと走り出す。

そして車で移動する間に、手に入っている情報をノエルから報告してもらう。

「犯人の数は、わかっているだけで3人。ビルの中に何人いるかまではわかりませんでした」

「了解だ。・・・犯人は関係者なのか？」

「監視カメラの映像で獣人らしき特長が確認されました。間違い

ないかと・・・」

・・・気を引き締めなければいけないな。

通常の人間が犯人ならばいい。

だが、相手が獣人ならば話は別だ。

高い筋力と瞬発力を誇り、性格も残忍な者が多い。

それが徒党を組んできたのなら、油断は禁物なのだ。

「恭也様、あのビルです」

どうやら目的地に近づいたようだ。

示されたビルより少し遠くに車を停める。

獣人は耳もいい。

ビルの前で停めては、こちらが発見されてしまう可能性があるのだ。

足音をたてないように気をつけながらビルへと進む。

前衛を俺が務め、ノエルは後衛として追従する。

彼女も忍のボディーガードを務めている為、能力は申し分ない。

安心して後ろを任せられる。

ビルの入り口に差し掛かり、**気を引き締めな**おす。

ノエルとアイコンタクトで肯きあい、ビルへと突入しようとした瞬間。

[illegible]

雄叫びがビル内に響き渡る。

「つく、なにが!？」

「わかりません!？」

ノエルも困惑しているようだが、問答をしている暇はないようだ。

雄叫びが響いてから断続的に衝撃音が最上階から響いてくる。

「迷っている暇はない、最上階に向かうぞ！」

「わかりました！」

俺は小太刀を、ノエルはナイフと拳銃消音機付きを構え、階段を駆け上がる。

10階建てのビルをずんずんと駆け上がり、今や衝撃音が聞こえなくなった最上階へと到達する。

その階に、内側からの衝撃で壁が盛り上がった部屋を見つけ、ドアに近づく。

音をたてないようにドアをゆっくりと開き中を窺う。

すると、そこには・・・

「・・・!?!」

倒れ伏した5人の獣人と、気を失っているすずか。

そして・・・すずかを抱き上げてこちらを見つめている黒い異形の姿があった。

Side Out

Side 湊・レイリア

内心、背中から冷や汗がダラダラと流れていると思う。

周りのお兄さん達は、しばらく呆然としていたが、今ではこちらを物凄い形相で睨んでいるのだ。

正直、やっちゃった感でいっぱいだw・・・なんて暢気にしてられない状況だ。

「貴様、何者だ！」

リーダーらしき男・・・面倒だ、【男A】が俺を睨みつける。

周りの男達【男B、C、D】も先程までの舐め回すような目つきを顰め、殺気だった目をしている。

男達の後ろに居たすずかは、気を失ってしまっているようだ。

・・・こんな腕を見たんだからショックだったんだろう。

だが、都合がいいのかもしれない。

現状を抜け出すには、こいつらを無力化しなければならないのだから・・・

〈藍、いけるな?〉

〈もちろんです、マスター!〉

「答えろ！」

「……アーミット。……アーミット【ケルベルス】だ!!」

「『**コンセプション**
覚醒召還!!』」

名乗り上げ、始動キーを詠唱。

身体が光りを放ち、エーテル装甲を構成していく。

左腕だけだった外殻は全身に及び、俺の身体を包み込む。

そして海鳴で、黒き獣が産声を放つ。

[illegible]

可聴領域を越えた雄叫びを撒き散らし、一番近くの男へと躍りかかる。

先程、自身に襲い掛かった男を凌駕する脚力をもって、一瞬で距離を詰める。

「つな_n、グハア!?」ドン!

右の拳を鳩尾に叩き込む。

殴られた男は体を丸め倒れこみ、のた打ち回るが、首筋に手刀を喰らわせ沈黙させる。

・・・1人。

「てめえ、よくも！」

仲間を倒されて激昂した1人が襲いかかってくる。

殴られる寸前で上空に跳躍、体を捻り天井に着地。

すぐさま天井を跳ね、落下運動を加えた膝蹴りを肩口へと吸い込ませる。

ボキッ！という嫌な音をたて、男の骨が碎ける。

「ぐああああ！！？」

骨が折れた痛みにも声をあげるが、頭を掴みあげ、投げつける。

投げた方向には偶然、男が近づいてきておりそのままぶつかっていた。

「・・・ちよつとまじブハア！？」

あまりの勢いに、【男C】は間拔けな声をあげながら吹き飛ばされ、壁に仲良く埋もれた。

・・・なんというか、不憫な奴だ（ホロリ

だが、これで残りは1人。

「俺は、そいつらのようにはいかんぞ！」

「!？」

後ろから迫ってくる声に振り返ると、男の姿が見えた。

体を捻り、拳を避けながらその場を飛び退き、距離をとって相対。

ふと、男の顔を見ると、開いた口からは鋭い牙を覗かせていた。

〈・・・やれやれ、狼男みたいなもんか？〉

〈満月が出ていれば、お似合いですね〉

〈まったくくだな〉

念話の内容は、緊張感もなにもないものだが、それは仕方ない。

確かに、先程の男達よりは能力が高いだろう。

だが、それでも【アーミット】の能力には及ばないのだ。

へ一気に片をつけるぞ!」

「Yes, Master. アーティファクト内、エーテル循環率向上!」

「つく!?!」

左腕の【永遠に続く慟哭】アーティファクトに送られるエーテル量が上昇し、紅く発光を始める。

その現象に男は距離をとろうとするが、もう遅い。

エーテルを循環させ強化した脚力で、男へと跳び込む。

「はっ!」

「ぐう、があ!?!」

右の拳を腹部に叩き込む。

さらに、拳の引きと腰の回転を利用した勢いを利用して、左腕で同じ部位にアッパーを叩き込む。

その威力に男の体が宙に舞う。

跳躍し、男と同じ高さで左腕を振り払う。

「ライジング・バッシュ!!」

「ぐおおお!!」

強烈な裏拳を喰らい、男は地面へと激突するが、勢いは止まらない。

水面を水切りで飛んでいく石の如く、地面を撥ねながら壁へと激突し、ようやく止まる。

動かなくなった男に近づき、気絶しているのを確認した。

「・・・ふう、制圧完了だな」

『敵性固体群の沈黙を確認。戦闘終了です、マスター』

初めての实战でこれだけ動けば問題ないだろう。

・・・魔導師相手に、ここまで無双できるかはわからんけどな!

まあ、それは置いてっと。

「藍、あの娘は大丈夫か？」

『身体に異常はありません。気を失っているだけです』

「そっか、よかった」

すずかの無事を確認し、安堵する。

そして、縛っている縄を切り、横抱き・・・所謂、お姫様抱っこをする。

そして歩きだそうとして・・・

『マスター、後ろです！』

「!？」

振り返ると、開いたドアから1組の男女がこちらを見つめていた。

あれって、【高町 恭也】と【ノエル・エアリヒカイト】か？

ああ、すずかを助けに来たのか。

なら、引き渡しておわら「すずかちゃんを放せ！」・・・マジか!？

「つくう!？」

先程の獣人並の瞬発力で突進してくる恭也を避け、大きく距離をとる。

（殺気だっている恭也は、半端ないよ・・・マジで！）

すずかに怪我をさせないように、そつと床に横たわせ、すぐにその場を離れる。

俺が離れると、すぐさま恭也が俺とすずかの間に入り、ノエルがすずかを確保する。

ノエルがすずかを抱き上げ、部屋を出て行くのを見届けて、恭也と睨み合う。

（・・・なんで、こうもフラグが湧いてくるんだよ！？^{死亡}これも神様のせいかな！？）

転生から、こうもフラグが続くことに、本気で嫌気がさしてくる。だが、今は現状を切り抜けるのが先決だな・・・

「っはあ！」

「っ！？」

抜刀し、問答無用で斬りかかってきた小太刀に対し、左腕で防御する。

だが、防御したはずの腕をすり抜けて、胸の装甲に刃が届く。

（つく、これが【貫】か！？）

幸い、エーテル装甲に傷が付くような攻撃ではない。

けれど、こちらから攻撃するわけにはいかない。

敵対する必要があるし、これ以上死亡フラグが立ってほしくない！

ゆえに・・・

「つく、ちょこまかと！？避けるな！」

（避けるにきまつてるだろうが！？）

天井や壁など、部屋の空間全てを使つての回避行動。

・・・この部屋、窓がないから出られるのは扉だけなんだ。

さらに恭也も逃がす気は無いようで、隙を突いて扉から逃げれない。

・
・
・あれ、詰んだ？

05話 「・・・誰か、助けてください！」（後書き）

・・・戦闘描写って難しいですねえ^^；

主人公の技が、体術中心なんで、余計に難しく感じます><

話は変わりますが・・・

ノエルさんの設定について、とらハ3だとロボット（アンドロイド？）なんですが、リリなのだと明記されてないんですね・・・

なので、このお話でのノエルさんは【身体能力の高い人間】ということにさせてもらいます。

気に入らない方は申し訳ありませんが、あまり設定盛りすぎると、作者も混乱する可能性が高いので、ご了承ください><

それでは、またお会いしましょう^^ノシ

06話 「御神の剣、マジぱねえ」 (前書き)

最近、暑くて仕事から帰ってくるとグツタリな作者です。

まあ、それは横に置いておくとして。

今回からサブタイトルを本文に掲載。

読んでると何話か分からなくなってしまいう可能性もあるからです。

それでは、始まります。

06話 「御神の剣、マジぱねえ」

海鳴入り初日。

誘拐現場に出くわし犯人に襲われ、片付いたと思えば御神の剣士に襲われた。

・・・1日に2度襲われる俺。

まったくもって不幸だ！

某幻想殺しさん並に不幸の連続な1日。

・・・本で読んでも分にはいいけど、実際なってみるとたまったものじゃないよ？

魔法少女リリカルなのは―黒き魔爪― 始まります

06話 「御神の剣士、マジぱねえ」

Side 月村 すずか

目を醒ますと、私は誰かに抱えられて運ばれていた。

「・・・っあれ？」

「すずかお嬢様、気が付きましたか・・・」

「ノ、エル？」

「はい。ノエルです、すずかお嬢様」

抱えていたのは姉のボディガードをもこなすノエルだった。

あれ？私、誘拐されてビルに連れ込まれて・・・それで・・・女の
人が来て・・・！？

そうだ、あの人は！？

「ノエル、あの人は！？」

「あの人？・・・恭也様でしたら、敵の撃退中です」

「敵？私を攫った人たちの事？」

「いえ、獣人達は黒い甲冑の異形に制圧されていました。恭也様はすずかお嬢様を逃すために、その異形と戦闘状態にあります」

黒い甲冑？

あの人は左腕だけが変化していたけど、黒い腕をしていた・・・まさか！？

「ノエル、その甲冑の人は左腕が大きくなかった！？」

「・・・確かに、左腕が異様に大きくはありましたが「やっぱり！？」・・・すずかお嬢様？」

いけない、このままじゃあの女の人も恭也さんも危ない。

すぐに戻って2人を止めないと！

そう思うや否や、ノエルの腕から逃れ走り去ろうとする。

けれど・・・

「すずかお嬢様、何処へ行かれるのですか？」

すぐにノエルに腕を掴まれてしまう。

ああ、こんな所で時間を使っていられないのに・・・

「放して、ノエル！あの人達を止めないと！」

「・・・どういことですか、すずかお嬢様？」

私は、ノエルに見たことの全てを手早く話した。

偶然にも、女の人がビルに来て事件に巻き込まれたこと。

女の人が襲われると思ったら、獣人の男を倒してしまったこと。

そして、その女の人左腕が黒い腕に変わっていたことを。

その話を聞いたノエルは、厳しい顔を露にしていた。

「なんてことを・・・わかりました、すぐに戻りましょう！」

「急いで、ノエル！」

「お任せください、すずかお嬢様！」

ノエルは私を再び抱え、階段を駆け上がって行く。

（お願い、間に合って！）

S i d e O u t

S i d e 高町 恭也

(つく、なんだこのプレッシャーは!?)

・・・あの黒い奴は危険だ。

こちらを見つめているだけなのに、体が金縛りにあったように動けない。

だが、このまま連れて行かせるわけにはいかない!

すずかちゃんが危ないんだ!

動け、俺の体!

「すずかちゃんを放せ!」

有らん限りの気力を振り絞り、黒い奴に斬りかかる。

黒い奴は大きく跳び避け、俺から距離をとった。

小太刀を構え直し、黒い奴と相対する。

すると、黒い奴はすずかちゃんを静かに横たえさせ、その場から退いた。

（・・・すずかちゃんを手放した？何故？）

そうは思うが、今はすずかちゃんの安全確保が最優先だ。

ノエルに目配せし、黒い奴とすずかちゃんの間に入る。

俺の意を酌んだノエルは、すずかちゃんを抱え上げドアから出て行く。

これでいい・・・後は・・・

「っはぁ！」

奴を倒すのみ！

素早く踏み込み、小太刀を振るう。

奴は左腕で防ごうとしているが、そうはさせん！

「っ!?!」

御神流 【貫】

相手の防御を見切り、突き通すための、刹那の見切りによってすり抜けたように錯覚させつつ攻撃する御神の業。

左腕を抜き、胸を斬り付ける。

だが・・・

(馬鹿な、傷一つないだど!?!?)

想像以上の固さに動揺が奔るが、動きは止めていない。

2撃、3撃と二刀で連撃を重ねていく。

しかし、奴は初撃以来、防御せずに避けるだけだった。

壁や天井すら足場にして、俺の斬撃を悉くかわされていく。

「つく、ちょこまかと!?!? 避けるな!」

どの斬撃もギリギリで避けられている。

まるで俺の思考を読んでいるかのように、紙一重でかわされているのだ。

・・・なんて奴。

やはり出し惜しみなどしてられない。

俺は心を落ち着かせ、集中力を高めていく。

そして高まった集中力により・・・

「永全不動八門一派・御神真刀流、高町 恭也。推して参る！」

世界はモノクロへと色彩を変えた。

S i d e O u t

S i d e 湊・レイリア

「永全不動八門一派・御神真刀流、高町 恭也。推して参る！」

恭也が名乗り挙げると、急激に動きが変わった。

完全に避けたと思った斬撃が、掠っているだけだが当たっていく距離をとろうと跳べば、ピッタリと張付いたように跳んで俺から距離を離さない。

(・・・これが【神速】・・・厄介極まりないな)

リミッターが掛かってはいるが、アーミットの機動力に生身でついていけるなんて洒落にならない。

・・・御神の剣士はバケモノか!?

いや、俺が言えた義理じゃないけどさ。

『敵性固体の無力化を進言します、マスター』

『・・・ああ、このままじゃジリ貧だ。決めるぞ!』

『Yes, Master.』

藍の進言を承認し、アーティファクトが紅い光りを放つ。

この変化に、恭也も警戒し俺との距離をとった。

だが、この一撃で終わらせる!

『アーティファクトブレイク・コード【ガラム・スマッシュ】』

一時的に脚部のリミッターを4割まで解放し床を蹴り、右足にエーテルを集中させ、恭也へと跳び蹴りを放つ。

先程までの速度から、さらに早くなったことで恭也は対応が遅れたようだ。

「ガラムウウスm「やめて！」っ!？」

「つな、すずかちゃん!？」

静止の声に反応して軌道を恭也からどうにか逸らす。

無理な軌道変更によってバランスを崩しそうになるが、床に腕を突き立てて勢いを殺し着地する。

声のした方に目を向ければ、そこにはノエルに抱き抱えられたままのすずかちゃんがいた。

「恭也さん、その人は私を助けてくれたの!」

「っそ、そうなのか!？」

「・・・はい、すずかお嬢様のお話を聞けばそうなります」

どうやらすずか達は、恭也を止めに来てくれたらしい。

これで誤解も解けたようだ。

それにしても助かったな。

恭也が倒して逃げていたら、誤解されたままだった可能性があったからな。

すずかには感謝だよ。

「すまなかった！」

「申し訳ありませんでした！」

心の中ですずかに感謝していると、恭也とノエルがこちらに頭を下げてきた。

まあ、誤解だったとはいえ襲い掛かったんだしな。

「気にしないでいい。怪我もしてないんだからな」

「だが！」 「ですが！」

まったく、こっちがいいって言ってるのになあ。

妥協点を提示しないとずっとこのままって可能性ありそうだなあ。

俺は戦闘形態を解除して提案を述べる。

「なら食事でも奢ってくれ。それで帳消しだ・・・ん、どうした？」

恭也が俺を見て、呆然としていた。

・・・なにか俺がしたか？

「っお、お前女だったのか!？」

「・・・ああ、なるほどね」

どうやら恭也は、俺が女だったことに驚いているようだ。

ノエルは驚いていないようだ。

おそらくすずかから聞いていたんだろう。

厳密には男だがな！

「だれも男とは言っていない（女とも言わないがな）」

「・・・そうか」

なんだか恭也が煤けて見えたよ。

Side Out

Side 月村 忍

「そう、無事なのね。・・・ええ、分かったわ。その人も家に連れて来て頂戴」

「畏まりました」

ノエルからの電話を切り、椅子にどっかりと座りなおす。

すずかは無事に救出され、誰も怪我していない。

しいて言うならば、恭也がすずかの恩人に斬りかかったことだろう。

ノエルからの報告によれば、その女性は気にしていないようだが。

「・・・なんにしても、出迎えの準備をしなくちゃね」

4人が家に付くまでには、少し時間がある。

丁度、夕食時の時間に差し掛かっていることだし、恩人へのお礼もかねて食事を用意させよう。

そうと決まればフアリンに準備をさせなくちゃね。

「それにしても、黒い甲冑姿か。・・・ふふ、面白そうね」

思わず楽しげに笑ってしまった。

きっと今の私の顔は、とてもいい笑顔をしているでしょうね。

06話 「御神の剣、マジぱねえ」 (後書き)

・・・マッドに捕捉されそうな主人公・・・南無w

あれ？6話なのに1週間経ってない・・・^^；

そろそろ時間を本編に進めて行きたい・・・と思っているが進まない作者です(汗)

PV14, 000アクセス ユニーク2, 000人突破！

これも皆様のおかげです。

この結果を励みにこれからも頑張って行きたいと思います><

それではまた^^ノシ

07話 「あれ？またなんかフラグたった？」 (前書き)

どうも、こんばんわ。

今回は、はしょった感が否めません。

それでもよければどうぞ。

07話 「あれ？またなんかフラグたった？」

のんびりできるって、とても大切な時間なんだなと自覚しました。

最近、そんな余裕が無かったから感じる事ができたんだ。

……安らぎを下さい……

魔法少女リリカルなのは――黒き魔爪―― 始まります

07話 「あれ？またなんかフラグたった？」

Side 湊・レイリア

あの後、自己紹介を済ませ、すずか達の招待により月村邸に向かった。

特に話すこともないまま到着し、月村邸を見上げながら思った。

(……このブルジョアめ！)

転生前の生家は、ごく一般的な家庭だったため、月村邸の大きさに軽く嫉妬していた。

「どうかされましたか？」

「……いや、立派な家だと思ったただけだ」

「そうでしたか」

月村邸を見上げたままの俺を気にかけてノエルが声をかけてくれるが、無難な返答になってしまった。

まあ、金持ちに嫉妬したなんて言えないしな！

ノエルは特に気にした風でもなく玄関の扉を開けて室内へと案内してくれる。

室内に入ると、すずかちゃんによく似た紫色の髪の女性とノエルと細部が異なるメイド服を着た女性が待っていた。

「ようこそ月村邸へ。私は、あなたが助けてくれたすずかの姉、月村 忍。妹に代わって改めてお礼を言わせてもらおうわ」

すずかちゃんに似た女性は、やはりすずかちゃんの姉の忍だった。

すずかちゃんのようにウェーブのかかった髪ではなく、スラッとしたストレートの髪を腰の辺りまで伸ばしている。

顔立ち、プロポーションともに整った文句なしの美人……だが、機械弄りが趣味というマッドな人物だ。

まあ、今は関係ないか。

「湊・レイリアだ。気にしないでいい。偶然居合わせたただけだからな」

「それでもよ……ありがとう」

むう、やはり面と向かってお礼を言われると、むず痒いな。

「すずかちゃん、無事でよかった」

「ファ、ファリン!？」

向こうでは、ノエルの妹のファリンがすずかちゃんに抱きついていた。

すずかちゃんは抱きしめられて困った表情をしているが……

「ファリン、お客様の前ですよ！」

「はひ！？ご、ごめんなさい、お姉さまー！」

すぐさまノエルに叱られてしまい、すずかから離れて謝っている。

ああ、なんかいいな。

このまったりとした空気は転生してから初めてかもしれない……ご飯食べてる以外でな。

死亡フラグ在り過ぎて、こういう空気に飢えていたんだよ。

「それじゃあ夕食にしましょうか。ノエル、お客様を食堂までお願いね」

「畏まりました。どうぞ、こちらです湊様」

「……じゃあ恭也、逝きましようか」

「……ああ」

忍はそういうと、恭也を伴い奥へと消えていった。

……なんだか恭也の顔色が青を通り越して、白い顔をしてたんだが？

まあ、いいか。

ノエルについて食堂へと向かおうとする……が。

「私が案内するよ、ノエル」

「それは……「お願い、ノエル」……分かりました。お願いします、すずかお嬢様」

「ありがとう、ノエル……こっちです、湊さん」

そういつて、すずかちゃんが俺のほうに近づいてくる。

あれ、こんなにハッキリと意思表示する娘だっけ？

S i d e O u t

S i d e 月村 すずか

「私が案内するよ、ノエル」

私はノエルが湊さんを案内していかうとするのを止めた。

「それは……「お願い、ノエル」……分かりました。お願いします、
すずかお嬢様」

「ありがとうございます、ノエル……こっちです、湊さん」

深い訳なんてないけれど、なぜか湊さんの傍にいと体の中がポカ
ポカする。

……安心できるって言うのかな？

だから、近くに居たかったのかもしれない。

「ああ、すずかちゃん」

「あの……呼び捨てでいいですよ」

「わかった、案内を頼むよ、すずか」

「はい♪」

湊さんともっと仲良くなりたいな。

S i d e O u t

Side 湊・レイリア

モキュモキュ……コクコク……モキュモキュ……コクコク

あ、このムニエルお替り♪

……あれ、みんな俺を見て呆けてるんだけど？

「どうかしたか？」

「……いや、よく食べるわねえ」

「……すごい……」

忍は呆れたような顔をしている。

すずかは純粹に驚いているようだ

まだまだ入るけど……やっぱり遠慮したほうがいいかな？

〈マスターの胃袋は宇宙ですから……〉

〈ちょ!?!〉

〈事実です〉

〈たえ事実でもその表現はまずいって!?!?〉

俺、フードファイターになるつもりなんて……ないんだからな!?!?

〈少し間が空いたようですが?〉

〈な、なんのことかな!?!?〉

賞金付きメニューで稼ごうなんて考えてないよ!?!?

ホントだよ!?!?

・
・
・
・
・

ふう、「ごちそうさま」っと。

「お粗末さまです」

あれから開き直って、お腹いっぱい食べまくった。

恭也以外の4人は「もう、何も言うまい」 と思ったのか静かだっ

た。

そして残る恭也なんだが……………

「恭也。お前、なんで動きがカクカクしているんだ？ 顔色も悪いぞ？」

「イヤ、ナンデモナイ」

……………なんで片言なんだよ。

美味そうな夕食で、今になって恭也の異変に気づいたんだが、あの後、忍となにがあった？

……………いや、下手に探って藪からドラゴン出てきたら洒落にならんから、気にしないでおこう……………

そっとしておいてやるのも、優しさだよな！

……………

あれから再起動した恭也を加え、談話室で重要な話をする事となった。

まあ【夜の一族】関連のことなのは、ほぼ確定だろう。

「それで、私達のことなんだけど………」

忍の口から出たのは、簡単に言うところだ。

・月村家は【夜の一族】と称する吸血鬼の家系である

・誘拐犯達は獣人等との混血児で同じ【夜の一族】だが、忍やすずかは純血種。

・犯人達の狙いは月村家の財産だが、殆どがすでに諦めており、今回は想定外だったらしい。

・……そして。

「このまま私達の【盟友】になるか、全てを忘れるか………」
どちらがいいかしら？」

うん、脅されてるように聞こえるのは気のせいじゃないかな？

・……忍さんが怖いんですけど。

すごくいい笑顔なんだよ？

「…………お姉ちゃん」

「大丈夫よ、すずか。心配は要らないわ」

「嘘だ！」って叫べたらどんなにいいかな……

まあ喋る気もないし、俺自身も秘密の塊だからな。

「こっちもあの姿を見られてるからな。お互い秘密を共有しあう仲ということでもいいかな？」

「……ええ、それでいいわ。これからよろしくね、湊」

忍が差し出した手を取り、握手を交わした。

S i d e O u t

S i d e 月村 忍

握手を交わしてから、湊の待遇について話し合った。

どうやら湊は住む場所を探していたようで、その途中ですずか達に出くわしたらしい。

だから、恩人で盟友でもある彼女を、住み込みのすずか専属ボディ

ーガードとして雇うことにした。

腕については言うまでもない。

恭也をもつてしても、当てるのがやっとだったのだ。

これ以上に適役はないだろう。

何よりすずかも湊のことを気に入っているようだしね。

ただ問題があるとすれば……あの食事量だろう。

私達3人分（私、すずか、恭也）の倍は食べただろうか？

それなのに、腰周りは全くの弛みも無いのだ。

聞いてみたら、食べても太らないらしい。

……妬まSじゃない、羨ましい。

・ ・ ・ ・ ・

夜も更け、湊も与えた部屋に入ってしまった。

「それじゃあ、恭也。また明後日に会いましょう」

「ああ、なのはもすずかちゃんのお茶会は楽しみにしているか

らな。必ず来るさ」

「お休みなさい」

「おやすみ」

恭也を玄関まで見送り、私も私室に向かった。

その途中で、部屋に行ったはずの湊を見つけた。

何かを探しているのか、辺りを見回しながら歩いている。

「湊、どうかしたの？」

「ああ、忍。ちょうど探してたんだ」

「あら、何かあった？」

「さっき、言い忘れたことがあってな。……まあ、見せたほうが早いかな」

なんだろうか？

湊が廊下にある時計を見て呟いたので私も時計を見ると、その針は12時を目前にしていた。

どうやら、思った以上に時間が過ぎていたらしい。

恭也には悪いことをしたかもしれないわね。

そんなことを考えていると、急に視界が緑色の光に包まれた。

光の発生源に目を向けると、湊の周囲が光を放っていたのだ。

「ちょ!?! 大丈夫なの!?!」

「ああ問題ない。これが言い忘れたことに繋がるからな」

これが……って!?!

光り輝いた湊を見つめていると、湊の体に変化が訪れたのだ。

ボディースーツのような服に張り出していた胸が小さくなっていく。

私は、夢をみているのだろうか?

その体付きは、女性らしい体形から中性的な体系に変化している。

「えっと、湊?」

「これが言い忘れていたことだ。俺の性別は本来、男なんだがな。どういう訳か、普段は女の体になっちゃったんだ」

え？男？女に変わる？

「つく、くくく、あははははは！」

「お、おい、大丈夫か忍？」

「……ええ、大丈夫よ。それにしてもあなたの秘密もすごいわね」

「……まあな」

私の言葉に、湊は複雑そうな顔で頷いていた

それにしても……退屈させてくれないわね、湊は。

まさか男だったなんて。

それなら、すずかが気に入ったのもなんとなく分かる気がするわ。

本能的に感じていたのかもしれないわね。

……姉として、妹を応援してあげなくちゃね！

そうと決まれば、近くに控えた温泉旅行もいろいろ準備しなくちゃね♪

Side Out

07話 「あれ？またなんかフラグたった？」（後書き）

そんなわけで、湊は月村家にお世話になることに。

……まあ、策謀を巡らせている方が若干1名いますが。

次回はようやく本編介入です＞＜

08話 「原作開始……え？もう始まってる？」（前書き）

今日はこんな早い時間に更新。

今日は朝から夜中まで忙しいのです。

まあ、それは置いておいて、ついに原作へと突入していきます。

08話 「原作開始」……………え？もう始まってる？」

月村家に雇われて、初めての日曜日。

護衛対象のすずかに、今日の予定を確認する。

「今日はお友達とお茶会なの。湊さんを2人に紹介するね♪」

ふむふむ、本日の予定は友人を招いたお茶会か。

そっか、ようやく原作主人公との対面か……………ん？

「……………なん……………だとお！？」

魔法少女リリカルなのは―黒き魔爪― 始まります

08話 「原作開始」……………え？もう始まってる？」

Side 高町 なのは

私は高町なのは、私立聖祥大学付属小学校の3年生です。

ひょんなことからユーノ君と出会い、今は魔法少女をやっています。

ジュエルシード集めは大変だけど、この前みたいに被害がでないように頑張ります！

……でも、今日はお友達の月村すずかちゃんのお家でお茶会の予定なのです。

「お待たせ〜♪」

「じゃあ、行くか。バスの時間ギリギリだぞ？」

「は〜い、ユーノ君おいで」

こちら、お兄ちゃんの高町恭也さん。

すずかちゃんのお姉さん、月村忍さんに会いに、今日は一緒にお出かけです。

〈なのは、楽しそうだね〉

〈そうですね〉

〈うん、とっても楽しみなの♪〉

そして、ユーノ君。

私が魔法を使う切欠になった、ちよつと変わった喋るフェレットさん。

それに紅い宝石のようなデバイス【レイジングハート】。

なんでも、擬似人格？というものがあつて魔法初心者の私を助けてくれます。

いまでは頼りになるお姉さん？です。

「なのは、バスに遅れるぞ」

「あ、ごめんなさ〜い」

さあ、すずかちゃんのお家に出発〜♪

・
・
・
・
・

ピンポーン♪

「恭也様、なのはお嬢様、いらっしやいませ」

玄関について、呼び鈴を鳴らすと月村家のメイド長のノエルさんが出迎えてくれた。

「どうぞ、こちらです」

「お邪魔します♪」

ノエルさんに案内され、テラスに移動すると、そこは猫天国でした。そんな猫いっぱいの特ラスに私の親友、すずかちゃんとアリサちゃん、すずかちゃんのお姉さんの忍さんが居ました。

すずかちゃんとアリサちゃんは小学校の1年生からの付き合いで、ちよっとした出来事から今ではとっても仲良しさんです。

「なのはちゃん、いらっしやい♪」

すずかちゃんの専属メイドのファリンさん。

明るくて優しいお姉さんです。

ノエルさんとファリンさんがお茶の用意のために退出すると、お兄ちゃんと忍さんも連れ立って、テラスを出て行きました。

私は椅子で寝ている猫さんをそっと退かして座ると、金髪の綺麗なアリサちゃんが話を振った。

「相変わらず、すずかのお姉ちゃんとなのはのお兄ちゃんラブラブだよねえ」

「うん。お姉ちゃん、恭也さんと出会ってからとっても幸せそうだよ」

「お兄ちゃんはどうか？・・・昔に比べたら、笑顔が増えたかも」

そんな話を話しながら待っていると、すずかちゃんから話があるそうです。

なんだろう？

「今日は紹介したい人が居るの」

「わー、どんな人だろ？」

「そうね。すずか、はやく紹介してよ」

すずちゃんを紹介してくれるなら、きっと素敵な人なんだろうな
〜。

楽しみだな〜、はやく来ないk「キュ〜〜〜〜!?」ユーノ君!?

ユーノ君の声が聞こえた方を向くと、子猫に追いかけられているユーノ君が居ました。

……子猫は遊んでるだけかもしれないけれど、追いかけられているユーノ君はとても必死な感じです。

「ユーノ君!？」

「アイン、ダメだよ!」

「は〜い、お待たせしました〜。苺ミルクティーとクリームチーズクッキーで〜す♪っはわ!？」

そこにタイミングよく? お茶を運んできたファリンさんが来てしまいました。

ユーノ君は逃げるのに必死で、ファリンさんの足元を逃げ惑い、子猫も追いかけています。

ファリンさんは、踏まないようにしているけど、その度にフラフラとしています。

「ほうあう」

「ファリン、危ない！」

目を廻してしまったファリンさんを助けようと、私とすずかちゃんが駆け寄ろうとする。

けれど、距離があって間に合いそうにありません。

思わず目を瞑ってしまいました。

「っ!?!・・・・・・あれ？」

覚悟していた大きな音もせず、不思議に思っただけで目を開く。

すると、ファリンさんは誰かに後ろから抱きしめるように腕ごと支えられており、手に持っていたお茶や食器も無事のままでした。

支えていた人は、少しだけ青みがかった白い髪に綺麗な翡翠色の瞳をもつ女性でした。

もしかして、すずかちゃんの紹介したい人って、この人なのかな？

Side Out

S i d e 湊・レイリア

咄嗟にお盆を落とさずファリンを支えようとしたため、抱きしめたような姿勢になってしまった。

「あれ………はうあ!?!み、湊さん!?!ごめんなさ〜い!」

「いや、怪我はないか、ファリン?」

「は、はい、おかげさまで無事です!」

「そうか、よかった」

無事を確認し、ファリンを離す。

ファリンは失敗したのを見られたのが恥ずかしいのか、顔を赤くしてこちらをチラチラと見ている。

ああ、男に抱きしめられたのも恥ずかしかったのもあるかもな。

まだ知り合って1週間もしていない男に抱きしめられれば、気にならないはずが無い。

………それにしても、今の声を聞いたノエルが頭を抱えている様子が思い浮かぶなあ。

「湊さん、ありがとうございます」

「いや、気にしないでいい」

すずかがお礼を言うてくるが、本当に気にする必要はない。

「……それに、なのはとアリサは早く紹介してほしいみたいだしな。」

「あ、なのはちゃん、アリサちゃん紹介するね。この人は湊・レイリアさん」

「湊・レイリアだ、よろしく」

「高町　なのはです。よろしくお願いします!」

「初めまして。アリサ・バニングスです……すずかとはどういう関係ですか?」

すずかの紹介で挨拶を交わす。

なのはは元気よく挨拶してくれるが、アリサはなにか探るような感じで質問をしてくる。

どういった関係と言われてもなあ?

「知り合ったのはつい先日だ。雇われてすずか専属の付き人のような事をしている」

「……………不躰な質問をしてすみませんでした」

「親友を心配してのことだろう？ 謝る必要は無いさ」

「ありがとうございます」

俺の回答に納得したようで、素直に礼を言うアリサ。

TVを見ても思ったが、この娘は親友思いの優しい娘だ。

アニメ3期だと、ほとんど絡みがないのが勿体無い気がするよ。

……………あ、ちなみに俺の服装はメイド服じゃないからな？

仕事の服装はYシャツに黒いベスト、黒いスラックスの執事スタイルだ。

下着は最初に着ていたボディースーツのような物を着ている。

今は体が女だとはいえ、俺は男だ。

ブラやショーツを着けるなんて、俺の矜持が許さん！

「みんな、準備できましたよ♪」

「ありがとう、ファリン」

「「ありがとうございます、ファリンさん」」

俺達が話をしている間に、ファリンが外の席でお茶の準備を進めていた。

ファリンはドジなところが玉に瑕だが、メイドとしての能力に申し分がない。

さて、顔合わせも終わったし、俺はこの後に備えて見回りにでるかな。

「すずか、庭の見回りに行ってくる。2人とも、すずかをよろしく頼む」

「あ、はい。行ってらっしゃい、湊さん」

「「わかりました♪」」

3人を残し、敷地内の庭の見回りに出かける。

というか、ここの広さは庭と言うより林か森に近いと思わないか？

……まあいい、トラップにだけは注意して進もう。

やれやれ、どこから介入しようかねえ？

Side Out

Side 高町 なのは

すずかちゃんに紹介された【湊・レイリア】さんはとっても格好いい人でした。

綺麗な髪と瞳をした美人さんで、アリサちゃんの執事さんの鮫島さんのような執事服。

アンバランスなようできて、バランスが取れた湊さんの姿に私はなぜかドキドキしちゃったの。

……私、どうしちゃったんだろう？

〈……なのは、あの人から魔力を感じるよ〉

〈ひあ！？ゆ、ユーノ君！？〉

〈あ、ごめんなのは。驚かせちゃった？〉

〈う、ううん、大丈夫だよ！？〉

〈ならいいんだけど・・・・・・・・〉

きゅ、急にユーノ君から念話がきちゃったから吃驚したの！

はうゝ、顔が熱いのゝ。

で、でも、湊さんも魔導師なのかな？

そうだったらお揃いで嬉しいかも・・・・・・・・じゃなくて！？

ドクン！

「！？」

この嫌な感じ・・・・・・・・まさかすずかちゃんのお家で！？

〈なのは、ジュエルシードの反応だ！〉

〈やっぱり！でも、どうやってここをでるの？〉

〈僕に任せて！なのはは僕を追ってきて！〉

「ユーノ君！？すずかちゃん、アリサちゃんごめんね、ユーノ君を捜してくるの！」

ユーノ君はそう言うと、庭の奥へと走って行ったの。

私はすぐにユーノ君を追おうとする前に、2人に一言断って行く。

アリスちゃんは手伝うと言ってくれるけど、すぐに戻ると断ってユーノ君を追っていきました。

「発動した!？」

「まずい! 封時結界、発動!」

ジュエルシードの発動を感じて、ユーノ君が魔法を発動させました。

でも、封時結界ってなんだろう？

後でユーノ君に聞いてみよう。

そう思って、ジュエルシードの発動したほうを見る。

森の中に光りが現れ、収まった先にいたのは……………

「ほえ？」

「ポカーン」

……………とっても大きくなった猫さんだったの。

私が間の抜けた声を上げたのは、きっと悪くないと思うの。

ユーノ君なんて、ひどくやつれた様な顔になって「ポカーン」なんて擬音を口にしてたの！

「あ・・・あれは？」

「・・・・・・・・たぶん、あの猫の大きくなりたいて願いが正しく叶ったんじゃないかな？」

なんだか頭が痛くなってきたの・・・・・・・・。

今までのジュエルシードはもっと危ない感じがしていて、真剣に取り組もうと思った矢先なのに・・・・・・・・。

「とりあえず、危険だからジュエルシードを封印しよう」

「そうだね、すずかちゃんもあの大きさじゃ困っちゃうだろうし・
・レイジングハート「ブオン！」!?」

「にやあああああん!？」

レイジングハートを起動させようとした瞬間、私の頭上を金色の光が駆け抜け、猫さんを襲った。

振り返り、光が来た方角に目を向ける。

その先には、黒いマントを羽織った金髪の女の子が佇んでいました。

S
i
d
e

O
u
t

08話 「原作開始……え？もう始まってる？」（後書き）

そんなこんなで原作【魔王】高町なのはの登じ「デイベインバスタ
ー！」ぎゃああああ！？」

げ、原作ヒロインのた、高町なのはさんの登場です……ガク

次回はみんなのヒロイン？フェイトさん登場です。

それではさようn「スターライトブレイカー！」ちょ！？

追記

誤字報告があったので修正しました

まもはって誰だWWW

打ち間違えたorz

09話 「でっかい猫……ありだな」 (前書き)

台風の影響で空気が湿っているのか、洗濯物の乾きが悪かったです
^^;

皆さんの所はどうだったでしょうか？

まあ、私事は置いておいて本編どうぞ！

09話 「でっかい猫……ありだな」

なのはが巨大猫の出現に頭を悩ませていた頃……

「おお、あれが噂？のジャンボ猫かぁ……いいなあ」

『確かに可愛いですが、そんな事を言っている場合なのですか？あれはロストログアですよ？』

「ん、ああ気にするな。あれは正しく願いが叶ってるからな、暴走はしないだろう」

『……マスターがそう言うのでしたら』

藍は渋々といった感じだが納得してくれたようだ。

実際問題、あれはでかいだけだからな……ゴ○ラのように光線だしたりしないし大丈夫だろ。

……結界の外にでなければ。

『あ、光線吐きましたよ？』

「嘘だ!？」

藍の言葉に驚いてひぐらし風に叫んでしまった。

そして猫を凝視するが、光線を吐いていない。

『ええ、嘘ですよマスター』

「お前、性格変わってねえ!？」

魔法少女リリカルなのは―黒き魔爪― 始まります

09話 「でっかい猫・・・・・・・・ありだな」

Side フェイト・テストロッサ

「この反応・・・・・・・・ジュエルシード」

探索に来て数日で見つかるなんて・・・・・・・・運がいいのかな？

でも、これで母さんに頼まれた物が手に入る。

すぐに行かなくちゃ。

「バルディツシュ、認識障害魔法発動」

『Y e s s i r .
』

認識障害魔法を発動し、空へと飛び上がる。

これで一般人に見つかることは無いはず。

急いでジュエルシードのある場所へ！

・ ・ ・ ・ ・

ジュエルシードの反応があった付近に到着し、電柱の上に降り立った。

周囲を見回しジュエルシードを探す。

「たしか、この辺りのはず．．．．．っ封時結界!?!」

大きい屋敷付近を中心にして、私の居る場所まで結界が広がってきた。

この世界は魔法が無いはず・・・・・・・・まさか他の探索者が？

急いでジュエルシードを見つけ出そうと、結界の中心部を目指して飛ばうとした矢先。

中心付近から巨大化した猫が現れた。

猫？

・・・・・・・・可愛い・・・・・・・・じゃなかった。

あれがジュエルシードの暴走体。

他の探索者に先を越される前に。

「バルディッシュ、フォトンランサー」

『Photon lancer』

手に入れてみせる・・・・・・・・母さんのために！！

Side Out

Side 高町 なのは

ジュエルシードを取り込んだ猫さんへの攻撃に続いて、同じ金色の魔法が幾つも襲った。

いけない、猫さんが!?

「っな、魔法の光り!?!」

ユーノ君が驚いているけど、今はそれどころじゃないの!

「レイジングハート、お願い!」

『Standby ready. Setup.』

バリアジャケットと杖を展開して、一気に猫さんの所に飛んで行く。

猫さんの背中に乗ると、また金色の魔法が飛んで来た!

『Wide area Protection.』

レイジングハートを構えると、障壁が前面に展開して魔法を食い止

める。

でも、障壁に遮られたのを察して、猫さんの足元に魔法が飛んでいた。

「にやああああん」

「うわわわ!？」

痛みと衝撃で転倒する猫さんから慌てて飛び退く。

ふえゝ、危なかったよゝ。

〈なのは、大丈夫?〉

〈大丈夫だよ、ユーノ君〉

ユーノ君からの念話に答える。

あれ、ユーノ君何処に居るの?・・・・・・・・あ、あんな所に居た!

ユーノ君は私が頑張ってるのに木の陰に隠れてるなんて。

ちょっと後でO☆H A☆N A☆S I☆しないと・・・・・・・・

ガサガサ

「っ!？」

物音のした方に慌てて振り返ると、そこにはさっき見かけた金髪の女の子が木の枝の上に立っていました。

「同系の魔導師……探索者か、それに……バル
デッシュと同じインテリジェントデバイス」

「バル……デッシュ？」

「ロストログア【ジュエルシールド】『Scythe form
Setup』……頂いていきます」

彼女はそう言い放つと、鎌のように変化した武器を振りかぶって襲い掛かってきた……って、危ないの!？

『Evasion. Flier fin.』

レイジングハートのおかげでどうにか鎌を避けて空へと飛ぶ。

あ、ありがとうレイジングハートって、また来たの!？

ガキン

今度はレイジングハートで受け止めることが出来た。

目と鼻の先程の距離にいる彼女を見る。

「なんで急にこんな？」

「……………答えても多分、意味が無い」

私の質問に彼女は意味がないと断じられた。

鎌に込められる力が増し、拮抗していた関係が崩れる。

大きく弾かれて、お互いに距離を取った。

『Shooting mode.』

地面に降りて構え直し、レイジングハートを彼女に向ける。

『Divine buster Stand by.』

『Photon lancer Get set.』

木の上に降りた彼女もデバイスをこちらに向けていた。

お互いに動かず時間が過ぎていく……が、それもすぐに終わりを告げた。

「にゃおおおん」

（……………よかった、猫さん気が付いたみたい）

猫さんに気を取られて、彼女から目線を外してしまった。

それがいけなかったの。

目線を戻すと、すぐ傍まで彼女の魔法が近づいていたのだ。

（ダメ、間に合わない！）

障壁の展開も間に合わない距離まで来ていた。

恐怖のあまり、目を閉じて座り込んでしまう……………が、いつまでも衝撃や痛みは襲ってこなかった。

（あれ、さっきもこんなことがあった気がするの）

既視感を感じながら、恐る恐る目を開く。

「・・・・・・・・怪我はないか？」

「ふえ〜〜〜!？」

目の前には、TVの特撮にでてくるような黒い仮面のライダーさんが佇んでいたのです。

S i d e O u t

S i d e 湊・レイリア

フェイトの攻撃が届く直前になのはの前に立ち、
【永遠に続く慟哭】
を【トールの鉄槌】へと変貌させ正面に掲げる。

フォトンランサーが掲げた腕に衝突するが大した衝撃もなく霧散した。

へえ、フォトンランサーじゃ傷付くこともないか……さすがアーテ
イファクト、なんともないぜ！

おっと、なのはをほっといたらいかんか。

「・・・・・・・・怪我はないか？」

「ふえ〜〜〜!？」

(なんでさ?)

助けたのに驚かれるって、ちょっと傷つくぞ？

まあ、見た目が異質だし仕方ないか。

周りを見回すと茂みの中からユーノ淫獣がこちらを窺っていたが無視する。

もし拘束されてもチェーンバインド程度なら腕力だけで破壊できるからな。

「バルディッシュ！」

『Blitz Action』

一瞬でフェイトが視界から消えるが魔力の流れを読み、居場所は特定できている。

俺の右後ろ！

ガキンッ!

いつの間にかサイスフォームに変わっていたバルディッシュの柄を掴む。

「っ嘘!?!」

「悪いが……そう簡単にはやられん!」

バルディッシュを【トールの鉄槌】と化している左腕を叩き込んだ。

その一撃でバルディッシュの柄は砕け、フェイトの顔に驚愕の相が浮かぶ。

「バルディッシュ!?!」

「悪いな。だが柄を砕いただけだ。1日もあれば元に戻る」

「っ!?!」

俺の言葉に反応してフェイトはバルディッシュを抱えると、飛び上がりこの場を離れていった。

俺はフェイトが見えなくなるまで眺めていた。

（あゝあ、こりゃ嫌われるかな？ だけどあんまりプレシアにジュエルシードは渡せないからな）

俺というイレギュラーがいるんだ。

原作にない展開が起こる可能性がある以上、あまり多く取られるのは望ましくない。

だが、全て回収するわけにもいかないのが現実だ。

フェイトがある程度の成果を出さなければ、原作以上に折檻を受けることになる。

この辺りのバランスが難しいな。

「「あ、あの？」」

背後から声を掛けられ振り向くと、なのはとユーノが近くまで来ていた。

「なんだ？」

「えっと助けてくれてありがとうございます。私、高町なのはって言います」

「ユーノ・スクライアです」

「……ケルベルスだ。」

「ケルベルスさんか、カッコイイ名前ですね♪」

満面の笑みでそんなことを言われると、背中がムズムズするな……

前世じゃカッコイイなんて言葉は無縁だったからなあ。

それにしても動物が喋ったり、お辞儀をするのはシュールだな……

「悪いが話はここまでだ。あの猫をどうにかするのが先決だ」

「そうですね」

「あ、うん。レイジングハート！」

『sealing mode. set up.』

「リリカルマジカル ジュエルシード封印!!」

『Sealing』

猫の周囲を桜色の光が覆いジュエルシードが封印され、レイジングハートへと収納された。

それを見届けた俺は、なのは達が気づく前にその場を後にした。

・ ・ ・ ・ ・

あれから屋敷に戻り、すずか達の居るテラスに向かった。

なのはとユーノは戻っているか確認しに来ただけだったが、すずかの勧めによってお茶会に参加することとなった。

「……それでね、偶然通りかかった湊さんが私を助けてくれたんだよ」

「ちよっとすずか、なんでそのこと言わなかったのよ！」

「きゅいゅい！？」

「あ、アリサちゃん落ち着いてえい！そんなに強く握ったらユーノ君の中身がでちゃうよい！？」

俺がすずかを助けた話を、秘密にしている部分以外だけ話していたらアリサが怒鳴りだした。

偶然ユーノを触っていた為、興奮したアリサはユーノ強く握り締めていた。

そんなアリサをなのはは必死に落ち着かせようとしていた。

ユーノ……南無

チーン♪

「ごめんねアリサちゃん、あんまり心配させたくなって……」

「不安にさせたくなかったんだ。すずかの気持ちも解ってやってくれ」

「解りますけど……やっぱり話して欲しかったって思っちゃうんです」

つく、このツンデレめ！

可愛いじゃないか!？

っと、いかんいかん、落ち着け俺！

どうにか落ち着きを取り戻す。

「アリサちゃん……ありがとう」

「……すずか」

「アリサちゃんが心配してくれて凄く嬉しいよ」

「あ、当たり前じゃない、友達なんだから！」

「うん、そうだね」

「っ！／／／」

すずかの顔はとても穏やかで優しい顔をしていた。

対してアリサはソッポを向いているが顔は真っ赤になっていた。

やれやれ、穏やかだねえ。

……………え、なのは？

なのはなら、ユーノと一緒にだ。

アリサから開放されたユーノを休ませたいって中に入っていたよ？

〈ユーノ君、さっき隠れてたよね…………〉

〈ま、待ってなのは！？あれには訳が！？〉

〈問答無用なの！ディバイイイイン…………〉

〈Buster〉

〈うわあああああああ！！！？！？〉

あゝ、紅茶が美味しいなあ……

09話 「でっかい猫・・・・・・・・ありだな」(後書き)

という訳で原作4話終了です。

此処まで来るのに長く感じました……

お話しくのとって難しいですね^^;

1週間に何回も更新されている方々を尊敬しちゃいます。

PV35, 000アクセス ユニーク6, 000人突破!

こんな駄文にお付き合いいただき感謝の言葉でいっぱいです^^

それではまた^^ノシ

10話「温泉はいい。でも入れないジレンマorz」(前書き)

なかなか時間が取れず今日一日で書き上げました><;

変な所があったらごめんなさいorz

それではどうぞ！

※誤字修正しました

10話「温泉はいい。でも入れないジレンマorz」

現在地―森林内だったりする。

〈まったく、忍の性格にも困ったもんだな〉

〈そうですね。マスターで遊ぶだなんて〉

しかし森林浴も悪くないな。

普段居る都会にはない清々しさと木々の間からは太陽の光が柔らかく辺りを照らしている。

散策に出てきたのは正解だったな。

〈あれ、私これで出番終わりですか？〉

メタな発言禁止!?

魔法少女リリカルなのは―黒き魔爪― 始まります

10話 「温泉はいい。でも入れないジレンマorz」

Side 湊・レイリア

やってきました温泉旅行。

いやあ、温泉だよ、お・ん・せ・ん！

温泉はいいぞ、温泉はリリンの産み出した最高の癒しだと思うね！

「……湊さんって温泉好きなの？」

「ん？ ああ、露天で景色を見ながら特にいいな」

「そうなんだ」

俺の隣に座っているのは恭也の妹の高町美由紀。

現在、俺は高町家の車に同乗させてもらっている。

俺の事は恭也から聞いていたらしい。

可愛いのに彼氏ができないのは、恭也の存在が大きいのだろうか。

「さあ、見えてきたぞ」

「あら、本当ねえ」

父親の高町士郎、母親の高町桃子。

第一印象で（……こいつら20代だろ？）って思った俺は悪くないはず。

ついでにこのバカップルぶりには辟易しそうだったりする。

……まあ、夫婦仲がいいのは良い事なんだけどねえ？

・ ・ ・ ・ ・

そんなこんなで色々とお喋りしながら旅館に到着したよ。

ほほう、いい旅館だな。

外観もいいし、緑に囲まれているから露天風呂からの景色は期待できそうだ。

だが問題は……今の時間は女湯に入らないといけない事だ。

「忍」

「なに湊？」

「周囲の散策に出てくる」

「あら、温泉入らないの？」

ニヤニヤしながら忍が問う。

「女湯に入れる訳にはいかないだろう」

「女なんだからいいじゃない」

忍め、わかってて言っているから性質が悪い！

つく、さっさと出かけるに限る。

「行って来る！」

「ふふふ、いってらっしゃい」

いい笑顔しやがって！？

Side Out

Side 高町なのは

温泉なの〜♪

温泉はいいよ〜♪

へな、なのは。やっぱり僕は恭也さん達と男湯に……

へえ〜、いいじゃない。一緒に入ろうよ〜

ユーノ君も今更何言ってるのかな？

家ではお姉ちゃんとも一緒に入ったのに。

「行くわよ、ユーノ！」

「キュ〜〜!？」

「あ、アリサちゃん」

……ユーノ君、連れてかれちゃった。

すずかちゃんもアリサちゃんを追っていつっちゃった。

わ、私も早く行かなくっちゃ！

「2人とも待ってよ」

「遅いわよ、なのは！」

「ふえ！？」

「もう、アリサちゃん」

ひ、ひどいよアリサちゃん。

「あ、なのは。洗ってあげるからこっちにおいでよ」

「あ、うん。私もお姉ちゃんの背中流してあげるね」

「ありがとう、なのは」

美由紀お姉ちゃんに洗ってもらったお返しに、私も背中を流してあげました。

それにしても、お姉ちゃんはスタイルいいなあ。

なのはも将来は、お母さんやお姉ちゃんみたいになりたいです。

「ふあゝ、気持ちいい♪」

「ホントだね」

湯船に浸かって温泉を堪能です。

うゝん、やっぱり温泉はいいよう♪

・ ・ ・ ・ ・

温泉から出ると浴衣に着替えて。旅館の中を探検することになりました。

ユ一ノ君は、のぼせたのかぐったりしちゃったの。

廊下を歩いていると、前の方から橙色の髪のお姉さんが歩いてきました。

……あれ、なんか私の事見ているような？

「はあい、おちびちゃん達」

「ふえ？」

「君かね、うちの娘をあれしてくれちゃったのは？」

あの…あれってなんですか？

全く身に覚えが無いんですけど？

「ちょっと、なんなのあんた!？」

「あ、アリサちゃん」

アリサちゃんが間に入ってきてくれました。

うう、ありがとうアリサちゃん。

「なのはもなのはよ。身に覚えが無いならハッキリと言ってやりなさいよ!」

「にゃ!？」

あれ? なんだかこっちに飛び火してきたの。

なんで私まで怒られてるの〜!？

なんだか向こうのお姉さんも呆れてるの！？

「……あゝ、ごめんね。人違いだったみたいだよ、悪かったね。」

「わかればいいのよ！」

「……間違われたのって私だよね！？」

「まあまあ。落ち着いてなのはちゃん」

お姉さん、なんでアリサちゃんに謝ってるのかな！？

アリサちゃん、どうしてそんなに偉そうなの！？

すずかちゃん、私何にも悪くないよね！？

ひ、ひどいよ皆！

「おや、可愛いフレットだね。よしよし、なでなで」

「あ、はい」

ユーノ君は頭を撫でられて気持ちよさそうな顔をしています。

〈今の所は挨拶だけね〉

え!?!この声、お姉さんの声……でもこれって念話!?

〈忠告だよ。子供はいい子にしてな。じゃないと、ガブツツとい
くよ〉

ユーノ君も身構えて、お姉さんを睨んでたの。

〈……この人、あの黒い女の子の……?〉

〈それ以外に考えられないと思うよ〉

「それじゃあね」

そのままお姉さんは女湯の方に歩いて行ったの。

アリスちゃんはまだ少しだけ怒っているようだったけど、宥めよう
としたら

「なのは、あんたはもっとシャキツとしなさい!」

「また私が怒られるの!?!」

S i d e O u t

S i d e フェイト・テストロッサ

あの屋敷での戦闘から今日までにジュエルシードを見つけることが出来なかった。

今は、ようやく反応したジュエルシードの場所の特定を急いでいた。

あの黒い仮面は私よりも実力が高いのは前回の戦闘でも明らかだった。

だから、今度は来る前に手に入れないと。

〈あゝ、もしもしフェイト？こちらアルフ〉

〈アルフ、どうしたの？〉

私の使い魔、アルフから念話が入った。

少し前から見なかったけど、何処に行ってるんだろう。

〈ちよっと見てきたよ、例の白い娘〉

〈そう……でも、一言声を掛けてほしかったな〉

〈ああ、ごめんねフェイト。そうそう、あの娘だけど大した事ないね。フェイトの敵じゃないよ〉

そう、あの白い娘は敵じゃない。

問題なのは黒い方なんだ。

全身をデバイスのような金属的な装甲で覆われたあの人は、敵対すればアルフと2人がかりでも……

ううん、弱気になっちゃだめだ。

母さんのためにも、どんな障害だって越えていかなくちゃいけないんだ。

〈それでジュエルシードの方はどうなんだい、フェイト？〉

〈大分特定できてきたよ。今夜にでも捕獲できそう〉

〈さっすが私のご主人様！〉

でも、少しでも早く見つけなくちゃ。

白い娘がいるなら、黒い人がいる可能性があるんだから。

〈それでアルフは今、こっちに向かっているの?〉

〈ああ、ちょっと待ってておくれよ。もうあがるからさ〉

〈え、どうということ?〉

あがる? 何からあがるの?

〈今、温泉に入ってるんだよ。すっごく気持ちいいよ〉

〈……へえ、そうなんだ。私が働いてるのにアルフは温泉でのんびりしてたんだ〉

〈え、えっとフェイ……ト?〉

私が母さんの為に一生懸命頑張ってたのに、アルフは私に何も言わずに出かけて温泉に入ってたんだ。

これはお仕置きの必要があるかな?

〈……アルフ、今日と明日のご飯抜きだよ〉

〈ごめんよ! フェイト! ? それだけは許して! 〉

・・・ふう、これで少しは懲りてくれるといいけど。

〈もう、次からはちゃんとしてよアルフ？〉

〈わかったよ〜フェイト〜〉

ふふ、なんとなく涙目のアルフが目に見えちゃったな。

さあ、気を取り直して頑張ろう！

S i d e O u t

S i d e ア ル フ

「よ、よかった〜、ご飯抜きなんて私には拷問だよ」

ついつい入ってしまった温泉からでると、急いでフェイトの元へと向かった。

うう、許してくれたけどもう一回謝らないとねえ。

あ、いたいた。

「おいしい、フェイト〜！」

「アルフ、お帰り」

「ごめんよフェイト。これからちゃんと働くからさ」

「うん、頼りにしてるよアルフ」

ほっ、どうやら機嫌を直してくれたみたいだね。

よかったよかった。

「あ、そうだ。ここのジュエルシードを手に入れたらフェイトも温泉に入るといいよ」

「え？」

「広域探査で疲れただろう？ 疲れを癒すのに丁度いいじゃないか」

うんうん、それがいい。

フェイトも疲れがとれるし、私もじっくり温泉に浸かれる。

この世界で言うなら【二石二鳥】だっけ？

「・・・・・・・・そうだね。少しだけなら入ってみようかな？」

「決まりだね！それじゃあ、さっさとジュエルシードを手に入れて温泉に行こう！」

「もう、アルフ。気が早すぎるよ」

そういうフェイトの顔もなんだか嬉しそうなんだけどねえ？

まあいいさ。

さあ、張り切って行ってみよう！

・・・・・・・・

なんて意気込んでたけど、見つかったのは夜になってからだだったよ
トホホ。

10話「温泉はいい。でも入れないジレンマorz」(後書き)

こんな感じになりました。

皆さんいかがでしたでしょうか？

これからも駄文かと思いますがよろしく願いします＜＜

11話 「これなんてフラグ？」 (前書き)

今回は短いです。

真面目に仕事が忙しい……

誰か代わってk (r y

11話 「これなんてフラグ？」

草木も眠る丑三つ時。

高町、月村家の全員が寝静まった真夜中に、日中で楽しめなかった温泉を楽しんでいたんだが……

「いやゝ、いい湯だねえフェイト〜♪」

「うん、そうだねアルフ」

「……」

なんでフェイトとアルフがここに居る？

魔法少女リリカルなのは―黒き魔爪― 始まります

11話 「これなんてフラグ？」

Side 湊・レイリア

「……やっぱりなのは負けか」

『仕方ないでしょう。魔法を知ったばかりの者が、訓練された魔導師にそうそう勝てるものではありません』

「……まあ俺も人の事言えない……ってか、なのはよりも経験浅いんだよね？」

俺達は旅館からサーチャーを飛ばし、ジュエルシード争奪戦を見学していた。

介入しないのかって？

いや、なのはがフェイトとのお友達フラグ建ててる所を邪魔できないでしょ？

『マスターは研究過程で戦闘技術をインプットされていますからね』

「そうだったなあ。でも、あれって変な感覚だったよな」

体は動きを覚えているけれど、思考がいまいち付いていなかった

のだ。

今では理解できているから良いものの、あのまま介入していたら痛い目に遭っていたと思う。

さて、それは置いというて……

〈温泉に行くぞ!〉

〈今からですか?〉

〈今だからこそだ。日中は入れんが今の時間なら入っている人も居ないだろ〉

12時頃から男の姿で入るのも1つの手だが、2時間という制限が付いてくるんだ。

2時間で十分だと?

馬鹿を言うな!

温泉に浸かって温まった体を冷ましてからまた温泉に浸かるループ。

(途中、水分を補充するのも忘れない)

これが俺の楽しみ方だ!

・
・
・

・
・
と言う訳で、やって参りました！

脱衣所には誰も居らず、シーンとしていた。

「よし、誰も居ないな」

『浴室内も人の気配はありませんね』

そうとわかれば、すぐに浴衣を脱いで籠に収め、浴室に向かう。

ただし、いきなり温泉に浸かるなんて愚行はしない。

ちゃんと体を洗ってから入るのがマナーだろう？

さてさて、入りますかね♪

「ふー、いい湯だなあ」

うーん、と思わず体が伸びをしてしまう。

浴室内を見渡すと、端の方に扉を見つけた。

おそらくあの扉から露天風呂に出るんだろう。

まずは内風呂を満喫してから入ろう。

「あゝ、極楽だなあ」

やっぱり温泉っていいな。

・ ・ ・ ・ ・

内風呂に入ってから30分。

一度湯船から出て、火照った体を冷ました俺は先程見つけた扉に手を掛けた。

扉を開けると、外からは涼しい風が吹き込んできた。

春とはいえ4月の夜はまだまだ涼しい。

でも、それは温泉に浸かるには丁度いいと俺は思う。

そして肝心の露天風呂はと言うと――

「・・・・・・いい眺めだ」

――満天の星を見上げられる露天風呂だった。

山間に位置する温泉旅館のため、空気が澄んでいるから星がよく見えるのだ。

……うん、来て良かった！

〈マスター、魔力反応が近づいています。どうされますか？〉

〈なのはとユーノか？〉

〈いえ、あの黒い少女と未確認の魔力反応の2つです〉

へ（フェイトとアルフか）…………念のためリミッターを分割に設定変更してくれ〉

〈了解しました。リミッター再設定…………完了しました〉

〈念話も反応が離れるまでは禁止だ。遠のいたら教えてくれ〉

〈Yes, Master.〉

一応、敵対関係と認識されてるだろうしな。

これでこっちに来ることもないだろう――

「ああ、極楽ごく「ガラガラガラ」……………」

「うわぁーお、こっちはいい眺めだね♪」

「・・・・・・・・キレイな星空だね」

「・・・・・・・・なんでさ？」

——と思っていた俺は甘かったんだね・・・・・・・・

S i d e O u t

S i d e アルフ

うーん、気分がいいねえ♪

ジュエルシードが一気に2個も手に入るなんてさ。

あの白い魔導師の娘はフェイトに敵わないし、あの使い魔のフェレットも逃げ回ってただけだったし。

これからも順調に進みそうだねえ。

フェイトが気にしてた黒い奴も現れなかったし、これからも出てこないでくれないかねえ。

おっと、忘れてた！

「フェイト、フェイト！早く温泉行こうよ♪」

「そうだね、行こうか」

温泉は昼に入ってたけど、本当にいいねえ。

露天風呂つてのもあるみたいだし、今度はそっちに入ろう。

「・・・・・・・・あれ？」

「どうしたんだい、フェイト？」

「魔力反応がする」

「さっきの魔導師達と違うのかい？」

「違うよ。反応が小さいから」

確かにあの白い魔導師の娘は魔力が大きかったし、使い魔の方もそこそこだっだからねえ。

「いくら管理外世界だからって、全く居ないって訳じゃないんだろうし、気にしないでいいんじゃないかい？」

「・・・・・・・・うん、そうだね」

「そ・れ・よ・り、早く温泉入ろうよ♪」

「うん」

管理世界にだってリンカーコアを持ってない人間が一杯いるんだ。

それに、もし敵だったとしても関係ないさ。

——向かってきたら倒す——それだけさ。

・ ・ ・ ・ ・

あたし達が露天風呂に入ると、1人の女が温泉に浸かっていた。

こんな時間にも入る人がいるんだねえ。

「うゝん、気持ちいいねえフェイト」

「・・・・・・・・うん、気持ちいいね」

フェイトも顔が緩んでるねえ。

どうやら気に入ってくれたみたいだ。

疲れを癒して、次のジュエルシードも張り切って見つけようじゃないか。

．．．．．それにしても、あの女、気になるねえ。

女の癖に、なぐんかあたしを刺激するって言うか．．．．．惹かれるものを感じる。

なんだろうねえ？

S i d e O u t

S i d e フエイト・テストロツサ

今日は収穫があった。

一気に2つもジュエルシードを手に入れたんだ。

これで母さんも喜んでくれるかな？

次も頑張らなくちゃ。

．．．．．それにしても。

「うーん、気持ちいいねフェイト」

「……うん、気持ちいいね」

温泉って本当に気持ちいいな。

なんて言うのかな？

癒される？そんな感じだと思う。

空を見上げれば、星がキラキラと輝いてとても綺麗だ。

でも、気になるのはあの女の人。

あの人からは小さいけれど魔力反応がある。

さっきの反応もこの人だろう。

それだけだったらそれほど気にしなかったけど……

（母さんみたいな感じがする）

顔も髪の色も全く違うのにそう感じてしまった。

近くにあの人が居るだけで、心が安らぎを覚えたんだ。

これって温泉のせいで錯覚してるのかな？

でも………こんなにも安らげるならそれでもいいかな。

（それにしても、アルフは何で顔が真っ赤なのかな？のぼせちゃった？）

Side Out

Side Others

旅館から離れた森の中の出来事。

「ユーノ君！今度は逃げてたんだね！」

「ちっ違うよ、あの使い魔を引き離してたんだよ！」

「問答無用なの！ディバイン！」

『Buster』

「ひiiiiiiii!？」

ちよっぴり不機嫌なのはさんでした、まる。

11話 「これなんてフラグ？」 (後書き)

温泉の楽しみ方は人それぞれ。

私は長い時間入っていたい人です W

それでは^^ノシ

12話 「イレギュラー」 (前書き)

原作乖離する場面が含まれています。

そういったものが駄目だと思われる方は「戻る」を押してください。

それではどうぞ。

12話 「イレギュラー」

4月26日

この日、正史には存在しない事象が発生する。

それがこの世界にどんな影響を起こすかは、誰にもわからない。

魔法少女リリカルなのは――黒き魔爪―― 始まります

12話 「イレギュラー」

Side アリサ・バニングス

私は我慢の限界だった。

「いいかげんにしなさいよ！」

原因はなのはだ。

この間の旅行から、何を話しても上の空で考え事をしている。

呆然としているのはとすずかを置いて、私は教室を飛び出した。

すずかの止める声が聞こえたけれど、そのまま駆け出していた。

「アリサちゃん！」

「………何よ？」

後を追ってきたすずかに対して、不機嫌を隠さずに返事を返した。

「何を怒ってるのかは、なんとなく解るけど「解ってる！」……
……」

「私だって怒りたくないわよ！でも、なのはの態度がムカツクのよ！何で悩んでるって周りから丸解りなのに言ってくれないのよ！
？」

「………アリサちゃん」

「言ってくれば解決出来るかもしれない。出来なくても、一緒

に悩んであげることが出来るのに！」

でも、本当に苛立っている理由は別にある。

・・・どうして？

「・・・・・・・・どうしてあたしは親友の力になってあげられないのよ」

「・・・・・・・・」

親友の力になれない自分に怒りが込み上げる。

親友と悩みを分かち合えない、役に立てない自分の無力に嫌気がさす。

「やっぱりなのはちゃんの事・・・・・・・・好きなんだね」

「っな、そんなの当たり前じゃない！」

なのはが居たから、私達3人は仲良くなれた。

クラスからも浮くことなく過ごしているのは、なのはのおかげだっ
て言ってもいい。

そんな親友のなのはの力になってあげたかった。

．．．．．どうか、なのはの悩みが解決しますように．．．．．
．．．．．いつか、3人一緒に分かち合えますように．．．．．

S i d e O u t

S i d e ユーノ・スクライア

はじめまして、ユーノ・スクライアです。

事故によってここ【第97管理外世界】に散らばってしまったジュエルシードを探し出す為にやってきた結界魔導師です。

僕が発掘した物だから、自分で見つけ出そうとやってきたのはいいけれど．．．．．2個目の封印に失敗して魔力切れを起こしてしまった上に、それ以降は駆けつけてくれたなのはに頼りつきりなんて．．．．．情けない話だよ。

なのはの家族や友達にはペット扱いされてるし、美由紀さんや桃子さんには一緒にお風呂に入れられる。

なのはと一緒に居れば士郎さんと恭也さんの視線が陰しくなってい。

それでも出来ることをしようと思って、なのはのサポートに奔走しているんだ。

・・・・・・・・最近はその裏目に出ているのか、なのはに誤解されて酷い目に遭ってるんだけど・・・・・・・・

そんなのはなんだけど、学校から帰ってくると何だか浮かない顔をしていた。

あの黒い魔導師の娘を気にしているのは気づいているけど、どうやらそれだけじゃなさそうだ。

訳を聞いてみると、どうやら友達と喧嘩しちゃったらしい。

「違うよ、私がぼーっとしてたからアリサちゃんに怒られただけ」

そういうけど、原因の1つはきっと僕のせいだ。

なのはが魔法を知らなければ、こんな事にはならなかったかもしれない。

そう思うと、なのはに対しての罪悪感が浮かんできてる。

・・・・・・・・早くジュエルシードを集めないと。

手に入れたジュエルシードの数は6個、あの黒い魔導師と使い魔が3個。

この海鳴市周辺にあと12個のジュエルシードが未発見の状態だ。

これから探索に出るけど、夕食までに見つからなかったら僕だけでも探索を続けよう。

頑張らなくっちゃ！

S i d e O u t

S i d e ア ル フ

ガツガツ、モグモグ

「うーん、このドッグフードってのは美味しいね」

この世界の食べ物で一番美味しいんじゃないかい？

缶詰もいいけど、袋入りの方もお菓子みたいで乙な味だよ。

さーて、フェイトはご飯食べたかな？

「って、また食べてないじゃないか。駄目だよ、ちゃんと食べな
いと」

「大丈夫、少しだけ食べたよ」

少しだけって、スープがちよっと減ってるだけじゃないか？

「・・・・・・・・そろそろ探索に出ようか」

「フェイトが行くって言うなら従うけどさあ・・・・・・・・」

「それ、食べてからでいいから」

「っ!？」

フェイトに指摘されたそれを慌てて隠す。
ドックフード

べ、別にこれが食べたかったわけじゃないよ!？」

「そうじゃなくて!？あたしゃ、フェイトが心配なんだよ。広域探索魔法は消耗が激しいのに、碌に休まない上に食事も殆ど摂っていないじゃないか。」

「平気だよ、私は強いから」

「フェイト・・・・・・・・」

あたしのご主人様は本当に頑固者だよ。

でも、そんなご主人様だからこそほっとけないんだ。

今日こそ3つ目のジュエルシードを見つけてフェイトに休んでもらわないと！

「行こうか、母さんの為に」

「………ああ！」

絶対に見つけてみせるさ、フェイトの為に！

S i d e O u t

S i d e 月村 すずか

今日はアリサちゃんとなのはちゃんが喧嘩をしてしまいました。

喧嘩と言っても、アリサちゃんはそれほど怒っているわけじゃないみたい。

私もなのはちゃんの様子が気にはなっていたけど、アリサちゃんは我慢が出来なかったみたい。

教室を飛び出していったアリサちゃんを追って問いかけてみると、
なのはちゃんを心配しての事で微笑ましかった。

これが世間でいう……ツンデレなのかな？

アリサちゃんには言えないな。

「すずか、なに笑ってるの？」

「っあ、なんでもないよアリサちゃん」

「……まあいいわ。早く帰りましょう」

「うん。っあ、ちょっとだけ待ってて」

お稽古が終わったから、なのはちゃんにメールを出しておこう。

【なのはちゃん、アリサちゃんはそんなに怒ってないから大丈夫だからね。お悩み早く解決するといいね】

「まだすずか？」

「もう行くよ、アリサちゃん」

早く、元通りになるといいなあ。

S i d e O u t

S i d e 湊・レイリア

陽も暮れ、ネオンの光が渦巻く街中のビルの上で俺は立っていた。

『マスター、魔力流感知。ジュエルシードを強制発動させたようです』

「ああ、こっちでも確認できた」

アルフの魔力パターンを感じ取り頷く。

暫くすると桃色と金色の魔力光が迸り、ジュエルシードは沈静化したようだ。

遠くには、白と黒の魔導師が対峙しているのが見えていた。

今、あの二人の間に入り込むつもりは無い。

この【リリカルなのは】という世界の重要なイベントだ。

下手に入り込むのは無粋だろう。

『よろしいのですか、あのままでは……………』

「いいんだ。関与するのはもう少し後でいい」

『Y e s , M a s t e r .
』

この後、小規模の次元震が起こる。

それによって時空管理局が明日にも駆けつけてくるが、そんなのはどうでもいい。

……………どうでもいいとは言いきだが、物語の進行を邪魔するつもりはない。

『マスター、ジュエルシードが!?!?』

「きたか!」

ついに次元震が起こる。

レイジングハートとバルディッシュがジュエルシードを挟んでぶつかり合い、夥しい魔力の奔流が襲った。

なのはとフェイトは、その奔流に押し戻されて大きく吹き飛ばされていった。

この後、フェイトが身を挺して次元震を起こしているジュエルシードを封印するはずだ。

俺はその手助けをしてやれば、フェイトの負担は減るだろう。

『おかしいです。魔力が内側に収束しています!』

「なんだと!?!」

馬鹿な!?!

そんな事、この物語にはなかったはずだぞ!?!

ジュエルシードを中心に何かの形に変わっていく。

長い首、黒い甲殻を持った人よりも大きな蜘蛛のような異形。

あの姿はまさか!?!

「マガツカミだと!?!」

この世界に新たなイレギュラーが発生した瞬間だった。

12話 「イレギュラー」 (後書き)

補足事項

【マガツカミ】

人知れず発生している異形の怪物。会話が出来る程度の知性があり、更には人間を襲う危険な存在。

発生の原因の全ては明らかでないが、人間が変異することで発生する固体が存在する。

LOST CHILD ロストチャイルド wikiより抜粋

そんな訳でオリジナル展開が入りました。

次話は戦闘なので、作者もテンションが上がりそうです。

それではまたハハノシ

13話 「アーミット」 (前書き)

更新遅れて申し訳ありません><;

ちょっとバタバタしててPC使えませんでした(汗

それではどうぞ。

13話 「アーミット」

突如現れた異形——マガツカミ——

その存在は、湊の運命をどう変化させていくのだろうか。

魔法少女リリカルなのは——黒き魔爪—— 始まります

13話 「アーミット」

Side 高町 なのは

フェイトちゃんのバルディッシュとレイジングハートがぶつかった瞬間、ジュエルシードが暴走しました。

その衝撃で私とフェイトちゃんは遠くへと吹き飛ばされてしまいました。

体勢を立て直してレイジングハートを見ると、全体に罅が入っていました。

……ごめんね、レイジングハート。

気を取り直して、ジュエルシールドがある方を見つめると、ジュエルシールドを黒い靄が覆っていたんです。

「……なに、あれ？」

「なのは、気をつけて！ 凄い魔力を感じる！」

「う、うん！」

ユーノ君に注意されて、レイジングハートを構えて見つめていた。

ジュエルシールドには黒い靄が集まって何かの形を作っていました。

徐々にその形がハッキリしてくると、思わず寒気を感じた。

……もしかして、あれって……

「く、蜘蛛おおお!？」

普通の蜘蛛と違って、体長は2メートル程あって頭が長く牙を持っている。

脚は4本しかないけど、尻尾の先には刃物のような大きな棘がある。黒くて硬そうな外殻は、なんとなくケルベルスさんを彷彿させるのでした。

……気のせいだよね？

「そんな！？ありえない！？」

「え、どうしたの？」

「さっきまでは暴走して魔力が荒れ狂ってたんだ！でも、あれがでてきたらジュエルシードの魔力が安定してるんだよ！」

え？それって正しく願いが叶ったって事？

でも、安定してるなら言い事じゃないのかな？

「……ジュエルシードの魔力を制御出来るなんて。しかも高密度の魔力なのにつ、なのは危ない！」

「ふえ！？」

私の肩の上で考え事をしていたユーノ君が声を荒げて叫んだのを聞いて、慌ててその場から飛び退くと、さっき私が居た場所に黒い物

体が降って来た。

それはあの蜘蛛だった。

いつの間にか近寄ってきていた蜘蛛が、私を押し潰そうとジャンプしたんだと思う。

地面を見ると、大きく陥没していて、その重量が凄まじい事が連想できた。

あの時、ユーノ君に声を掛けられなかったらと思うとゾツとする。

「あ、ありがとうユーノ君」

「いいから、今は逃げるんだ！」

「でも!？」

「今のレイジングハートじゃ、攻撃魔法の使用に耐えられないよ！」

「それじゃあ、あの蜘蛛はどうするの!？」

あの蜘蛛をそのままにしていたら、何をするかわからないのに！

「僕が引き付ける！レイジングハートは修復を開始してるから、時間が経てば攻撃魔法を使える！」

「駄目、そんな危ないよ!？」

「今出来る事をするんだよ、なのは!僕じゃあの蜘蛛は倒せない……っ、チェーンバインド!」

途中で言葉を切って、再び襲い掛かってきた蜘蛛にユーノ君がバインドを掛けた。

蜘蛛は魔法の鎖に縛られているけれど、その鎖は今にも壊れそうだった。

このままじゃ!？

「チェーンバインド!」

その声と共に、ユーノ君の緑色の鎖とは違う、橙色の鎖が蜘蛛に絡み付き、動きをさらに束縛した。

「フォトンランサー!」

その後には金色の光が蜘蛛へと奔り、その巨体^{はし}に直撃した。

「え?」

見ると、そこにはフェイトちゃんと人型に戻ったアルフさんが立っていました。

「フェイトちゃん？アルフさん？」

「……今は事態を収拾するのが優先」

「ま、そういう事さ」

「えっと？」

フェイトちゃんとアルフさんの言葉に困惑してしまいました。

そんな私に、アルフさんが頭を掻き篦り……

「あゝもう！協力してやるって言ってんだよ！」

「あ、ありがとうフェイトちゃん、アルフさん！」

さっきまで争っていたフェイトちゃん達が協力してくれる。

それだけで嬉しかった私は、フェイトちゃんと見詰め合っていました。

「わ、わかったから早く手伝ってよー!？」

「「「あ」」」

ユーノ君の情けない悲鳴に事態を思い出す私達。

それにしても、さっきまでは格好良かったのに……ユーノ君、締まらないの……

S i d e O u t

S i d e フェイト・テストロッサ

いけない!？と思った時には既に手遅れだった。

ジュエルシードを確保しようとした時、白い魔導師……高町なのはのデバイスとバルディッシュが交差した瞬間、強大な魔力の波動がジュエルシードから溢れ出した。

その衝撃で私達は吹き飛ばされ、バルディッシュも痛々しいほどに損傷してしまった。

「フェイト、大丈夫かい!？」

「アルフ。私は大丈夫だけどバルディッシュが……」

「壊れちゃったのかい!？」

「そこまでじゃないけど、魔法には耐えられないかもしれない」

たとえばデバイスが無くても魔法の行使は可能だ。

ただ普段より効率が悪くなったり、術式が安定し難かったりするんだ。

「アルフ、ジュエルシードは？」

「まだ確保されてないよ。あっちを見てみなよ」

「え？」

アルフの指差す方を見ると、そこにはまだジュエルシードが存在していた。

けれど、その周囲は黒い靄に覆われていた。

「周囲に魔力を拡散させたと思えば、いきなり治まって、あの靄が現れたんだよ」

「そうなの？」

「ああ、何なんだろうねえ」

「そうだね・・・・・・・・あれ？」

じっと見つめていると変化が起きた。

靄がジュエルシードに集まりだしたのだ。

暫くして現れたのは、とても大きな蜘蛛のような生物。

でも、あの魔力量は？

私と同等、もしかしたらそれ以上の魔力を持っているかもしれないなんて。

「アレはやばいよ、フエイト！」

「うん、分かってる」

アルフもあの魔力量を感じたみたいだ。

それにあの黒い外殻、屋敷で対峙した黒い人と似ている？

いや、今は気にしていられない。

「あの蜘蛛、白い娘を襲いだしたよ！」

「!?! いけない、早く追わないと!」

「あいよ!」

急いで蜘蛛を追いかけた。

すると白い娘のフェレットが、蜘蛛をバインドで拘束しているのが見えた。

けれどバインドは今にも壊れそうな状態なのに気が付く。

「アルフ、バインドを」

「……………助けるのかい？」

「今は緊急事態だから協力する。でもジュエルシードは」

「あたし達の物!」

行くよ、アルフ!

「チェーンバインド!」

アルフのバインドが蜘蛛を更に縛りつけ、その巨体を拘束する。

私はすぐに魔法を発動させた。

「フォトンランサー！」

私の攻撃が直撃し、蜘蛛の周囲が煙に包まれた。

それを確認し、私はあの娘へと視線を向けた。

「フェイトちゃん？アルフさん？」

「……今は事態を収拾するのが優先」

「ま、そういう事さ」

「えっと？」

私達の言葉を聴いて彼女は首を傾げた。

アルフは若干苛立ったのか声を荒げた。

「あゝもう！協力してやるって言ってんだよ！」

「あ、ありがとうフェイトちゃん、アルフさん！」

そして彼女と見詰め合う。

彼女がジュエルシードを集める理由を知った。

でも、私には母さんの為に集めるって理由がある。

だから譲るわけにはいかない。

でも、今だけは……………。

「わ、わかったから早く手伝ってよー!？」

「「「あ」」」

フレットのだらしない悲鳴に現状を思い出した私達。

いけない、しっかりしないと。

それにしてもあのフレットの声は情けなかったなあ。

……………ああいうのってヘタレって言うんだっけ？

S i d e O u t

Side 湊・レイリア

イレギュラー………マガツカミを確認した後、俺達は言葉を紡いだ。

「『コンセプション覚醒召還!!』」

原作でのアーミットの敵であるマガツカミ。

その存在は無視できなかった。

マガツカミはエーテルを求め、人々を襲う。

その事から、この世界では魔力を持つ人間を優先的に狙うだろう。

なら、今一番の獲物は、なのは達だ。

「急ぐぞ!」

『Yes, Master!』

ビルの上から駆け出し、大きく宙を舞った。

そして、重力に引かれ落ちそうな感覚を覚えた瞬間、足元に魔法で足場を形成し、再び跳躍する。

飛行適正のない俺がアーティファクト【奔放なる双翼】を展開せず空を移動したりする為に考えた技だ。

ユーノが魔方阵に立って詠唱したりするのを思い出し、改良した物だった。

『マスター、なのはさんが！』

「つく！？」

目を凝らして見つめると、今にもマガツカミの攻撃を受けそうな、なのはの姿が見えたのだ。

間に合わない！？と思った瞬間、ユーノがバインドで拘束し、その場を脱した。

だが、そのバインドは今にも引き千切られそうだった。

『到着まで後、30秒！』

とてもじゃないが、バインドが持ちそうに無い。

そう思うと、新たなバインドが出現し、マガツカミの体を縛った。

そのバインドは橙色で、アルフの物だと分かった。

さらに、金色の魔法がマガツカミに飛来した。

あれはフェイトのフォトンランサーだろう。

直撃し、辺りが煙に覆われた。

なのは達は少し話をしているようなので、邪魔をしないように近くに降り立った。

4人供、大きな怪我をしていないようでよかった。

しかしユーノ、情けない声を出すなよ……………。

S i d e O u t

S i d e O t h e r s

ユーノの悲鳴に現状を思い出したなのは、フェイト、アルフ。

その中でケルベルスの存在にいち早く気づいたのは、なのはだった。

「ケルベルスさん！」

「・・・・・・・・あなたは」

「あんたが・・・・・・・・何しに来たんだい！」

なのは前回助けられた事で好意的だが、フェイトは警戒しながら
見つめ、アルフに至っては喧嘩腰だ。

「全員、無事か？」

そんな雰囲気も何処吹く風と、ケルベルスは受け流した。

「私は大丈夫ですけど、レイジングハートが・・・・・・・・」

「・・・・・・・・バルディッシュが不調です。それ以外は特に「フ
ェイト！」アルフ、落ち着いて。解決が優先だよ」

「・・・・・・・・わかったよ」

ケルベルスの質問に答えたフェイトに、アルフが異を唱えようとする
が、フェイトの言葉に渋々と引き下がる。

そんな中、未だにユーノはイレギュラー——マガツカミ——にバイ
ンドを掛け続けていた。

正直、ユーノの顔色が青いような気がするが、まあいいk「よくないよ!?!」……………」

「そろそろユーノが倒れそうだ。一気に片を着けさせてもらおうぞ」

「は、はい!」

「お願いします〜!?!? わわ、もう持たないよ〜!?!?」

「おっと、いけない。チェーンバインド!」

「行きます。チェーンバインド!」

魔法初心者なのは以外のチェーンバインドに縛られて動きを制限されたマガツカミ。

その正面にケルベルスが佇んだ。

「俺の攻撃が当たった瞬間にバインドを解け。じゃないと一緒に飛ばされるぞ!」

「!」「はい! (あいよ!) (分かりました)」「!」

バインドを発動している3人の返事を聞き、ケルベルスは己のエーテルを左腕【永遠に続く慟哭】に巡らせる。

すると腕のラインが赤く発光し、凄まじい魔力が周囲を揺さぶった。それは、目の前にマガツカミなど、霞んでしまうほどだった。

その事実には4人は息を飲み、ケルベルスを見つめていた。

そんな4人を無視してケルベルスはマガツカミへと躍りかかる。

「喰らえ！」

「!？」

初撃は左腕による抜き打ち。

マガツカミの胴を捉え、それと同時にバインドが解かれる。

立て続けに強烈なアッパーが叩き込まれ、マガツカミの巨体を宙に舞わせていた。

蜘蛛に似た外見状、空を飛ぶことなど出来ないマガツカミは為す術が無い。

ケルベルスは跳躍し、マガツカミに追いつくと、爪と蹴りによる乱撃を喰らわせながら上昇していく。

「せい！」

吹き飛ばされる勢いが頂点に達した時、ケルベルスは足場を形成し、マガツカミを地面に向けて蹴り飛ばす。

上昇時よりも勢いづいて地面に激突したマガツカミは、何度も地面に叩きつけられ、既に虫の息と言つてもいいかもしれない。

そこに、無慈悲なる一撃が加えられた。

「ガルスマツシュ!!」

12

いつの間にか追いついていたケルベルスの左腕【永遠に続く慟哭】による一閃。

渾身の一撃にマガツカミは声にならない断末魔を挙げながら両断され、その体軀は緑色の光となってケルベルスに取り込まれた。

後に残ったのは、封印状態に戻ったジュエルシードのみだった。

ケルベルスはそれを見つめたが、すぐに踵を返し、夜の闇へと消えていった。

取り残された4人は、じつとケルベルスが去って行った方向を見つめたまま動こうとしなかった。

いや、動けなかったと言ったほうが正しいかもしれない。

S
i
d
e

O
u
t

13話 「アーミット」 (後書き)

お気に入り100件到達!! PV60,000 ユニーク10,000突破!!

登録していただいた皆様、読んでいただいた皆様、本当にありがとうございます!

前書きでも書きましたが、更新遅れて申し訳ありません。

これからも、こういった事があるかもしれませんが、最低でも日曜日には更新していきたいと思っています><;

それではまた!

14話 「管理局と死亡フラグと時々……」

マガツカミを倒し、月村邸に帰ると、鬼が待っていた。

「湊……仕事をサボって何処に行ってたの？」

「あっ」

次元震の対策を考えたりしていて、連絡するのを忘れていた。

その為、玄関を開けると、忍が仁王立ちして待ち構えていたのだ。

「……ちょっと躰が必要かしら、フフフフ」

あの、嫌な予感しかないんですけど？

すずか、ノエル、ファリン助けて！と、忍の後ろに居る皆に視線を送ると……

（（うん、それ無理））

デスヨネーorz

魔法少女リリカルなのは―黒き魔爪― 始まります

14話 「管理局と死亡フラグと時々……」

Side Others

時空管理局所属の次元空間航行艦船【アースラ】は哨戒任務を請けて航行していた。

その任務中、管理外世界での小規模次元震が発生。

その反応を感知したアースラのクルーは、目標の第97管理外世界【地球】へと向かっていた。

その艦橋では、観測班がキーボードを操作しながら詳細を纏めていた。

そんな中、一人の女性が艦橋内に入室してきた。

アースラ艦長【リンディ・ハラオウン】。

緑色の長髪をポニーテールで纏め、青い制服に身包んでいる。

街を歩けば、十人中十人が振り返る程の美貌の持ち主でもあった。

リンディは艦長席の傍に立ち、クルーに声をかける。

「皆どう、今回の旅は順調？」

「はい。現在、第三船速にて航行中です」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きは無いようですが・
・・・・ 探索者達の衝突する確率は高いですね」

「そう」

操舵士、観測士の報告を聞き、リンディは深く席に座った。

すると、紅茶を持って、オペレーターの【エイミィ・リミエッタ】
が近寄った。

「失礼します、リンディ艦長」

「ありがとね、エイミィ」

エイミィはリンディに紅茶を渡すとオペレーター席へと戻っていた。

口元まで紅茶を運びながら、リンディは声を漏らす。

「そうねえ、小規模とはいえ次元震の発生は……ちょっと厄介なものね」

「次元震終息後に出現した高魔力反応も、あれから現れていないようです」

艦橋内で立っていた、黒いバリアジャケットの少年が追加の報告を挙げた。

年の頃は10〜15歳位の少年が艦橋内に居ることは、普通なら異質だろう。

けれど管理局員内には、彼よりも若い少年少女も少なくは無い。

魔法の資質が高い者が少ない、古参局員の引退、就業年齢が低い等の理由により、管理局も低年齢化が進んでいるのだ。

「その事もあったわねえ。何かあるかわからない以上、危なくなったら急いで現場に向かってももらわないと……ね、クロノ」

「大丈夫。判ってますよ艦長」

そんな中でも、彼【クロノ・ハラオウン】は特別優秀な部類に入ら
だろう。

保有魔力はそれほど多くないが、魔導師ランクA A A +であり、難
関である執務官試験を突破した執務官なのだ。

アースラ内の魔導師の中で2番目の実力者、ちなみに第1位は艦長
のリンディである。

だが、艦長職にあるリンディが現場に出る事は、余程の事が無い限
りありえない。

よってアースラ実働部隊の中での最高戦力はクロノである。

「僕は、その為に居るんですから」

クロノは自らのカード、待機状態のデバイス【S 2 U】を掲げ、そ
う宣言したのだった。

S i d e O u t

S i d e プレシア・テストロッサ

バシッ！バシッ！

「つく！ああ！？」

時の庭園、玉座の間で私はフェイト・・・・・・・・いえ、人形に鞭を振るう。

人形は鞭に打たれるたびに、苦悶の声を漏らす。

「たった三つ・・・・・・・・これは、あまりにも酷い」

出来損ないの人形は、たった三つしかジュエルシードを集められなかった。

それなりに使えるとは思っていたが、これでは期待はずれもいいところだった。

「・・・・・・・・ごめんなさい、母さん」

「フェイト。あなたは私の娘。大魔導師プレシア・テストロッサの一人娘」

ああ、こんな人形が私の娘だなんて、口にするだけでも汚らしい！

でも、それは全てアリシアの為。

「不可能な事などあっては駄目。どんな事でも、そう、どんな事でも成し遂げなければならぬ」

「・・・・・・・・はい」

「こんなに待たせておいて、挙がつてきた成果がこれだけでは母さんは笑顔で貴女を迎えるわけにはいかないの。・・・・・・・・判るわね、フェイト？」

「・・・・・・・・はい、判ります」

「だからよ。だから、覚えて欲しいの。もう二度と母さんを失望させないように」

「っ!？」

人形は、再び握られた鞭に息を飲んだ。

けれど、容赦無く鞭を振るう。

バシッ！バシッ！

何度も何度も鞭を振るう。

バシッ！バシッ！

そうして人形がぐったりとするまで振るい続けた。

「ジュエルシードは母さんにとって重要な物。．．．．．でも新しく欲しい物が出来たわ。何かわかる、フェイト？」

「．．．．．判りません」

「まあいいわ。欲しいのは次元震が起きた時に現れた生物、もしくは、あの生物を倒した人物を連れて来なさい」

あの生物の魔力は異常だと直にわかった。

内包している魔力はジュエルシードと比べても遜色がない。

倒した者はそれ以上の可能性がある。

アルハザードへの道に、一步でも近づけるなら、どんな物でも利用させてもらう。

「．．．．．ケルベルス？」

「そう、ケルベルスって言うのね？」

「．．．．．はい」

「今度こそ、母さんを喜ばせて頂戴、フェイト。．．．．．さあ、行きなさい」

そう言って、人形を縛っていた拘束から解放する。

「・・・・・・・・行ってきます、母さん」

私は構わず、玉座の間を後にした。

S i d e O u t

S i d e アルフ

「フェイト！」

玉座の間からフェイトが出てきたけれど、その体は傷だらけでボロボロだった。

急いで近寄ってフェイトを支えてあげた。

何をされてたかは予想できていた。

鞭を打つ音が、外まで聞こえてたんだ。

「フェイト、ごめんよ大丈夫？」

「なんでアルフが謝るの？……平気だよ、全然」

フェイトは平気って言うけど、そんなはず無いよ。

あたしが支えなかったら、今にも倒れそうなのに！

「つく、どうしてこんな酷い事するんだよ！？」

「酷い事じゃないよ。母さんは、私の為を思ってって「思ってるはず無いよ！」アルフ……」

あの女がそんな事思ってるわけ無い！じゃなけりゃ、自分の娘をこんなになるまで傷つけるはずないよ！

どうしてフェイトは、あんな女を庇うんだよ！？

「……違うよ。だって、親子だもん。ジュエルシードは、きつと母さんに凄く大切な物なんだ。ずっと不幸で、悲しんできた母さんだから。私、何とかして喜ばせてあげたいの」

「だって、でもさあ……」

口からはそんな言葉しかでてきやしない。

フェイトは支えていた腕を抜けて、一人で立ちながらあたしに話しかけてくる。

そんなフェイトの姿を見ていたら、言いたい事が言い難いじゃないか。

「アルフ、お願い。大丈夫だよ、きっと。」

フェイトがあたしの頬を優しく撫でてくれる。

そんな優しいご主人様を助けてやりたい。

「だから行こう。今度はきっと……失敗しないように」

……見つけてやるさ。

あの女の為じゃない、誰があんな奴の為に働くもんか。

フェイトの幸せに必要ななら、限界だって超えて見つけてやる。

それが、使い魔としてあたしが出来る事だから！

S i d e O u t

S i d e 湊・レイリア

忍の精神攻撃（着せ替え）は、俺に多大な疲労を齎した。

忍は馬鹿笑いしていたし、ファリンも乗り気で服を持ってきてた。

ノエルは淡々と用意された服を俺に着せてきた。

ヒラヒラな服からメイド服、他にも色々な職業の服。

なぜ、持ってたし。

……おまけにギャグ補正が掛かったのか、力を込めても逃
れられなかったさ……

下着まで着させられそうだったが、それだけは勘弁してもらった。

強制されていたら、俺はきっと立ち直れなかったと思う。

すずか？すずかは終始、顔を真っ赤にしてたよ？

手で顔を覆っていたけど、指の隙間からちらちら見てた……

まあ、男の体じゃないからいいけど。

いや、良くないか？

まあ、そんなこんなで解放されたのは午前0時。

疲労がピークに達した俺は、ベットに入ると直に眠りについていた。

・ ・ ・ ・ ・

そうして目を醒ましてカーテンを開けると・ ・ ・ ・ ・夕日が傾いていた。

「・ ・ ・ ・ ・寝過ごした!」

『おそようございます、マスター』

「嫌味か!?!」

藍の発言に突っ込みを入れてから、時計を確認する。

【6:30】

どれだけ精神疲労してたんだろうね。

『マスター。ジュエルシードが発動していますか?』

「は?」

え、ちょっと待って。

もう一回言ってくれないかな、藍さん？

『ジュエルシードが発動しています』

「・・・・・・・・出かけるぞ！」

急いで服を着替える。

最初に着ていた服だ。

存外、動きやすくて重宝していたりする。

っと、忍に出かけるという報告も忘れてはいけない。

提供された携帯電話で忍を呼び出す。

「もしもし、どうしたの湊？」

「忍、今から出かけてくるが構わないか？」

「・・・・・・・・まあ、いいか。でも、あんまり遅くなっちゃ駄目よ」

「ああ善処する」

「こら！みなt「P*i*」……………」

政治家風な返答を返してやったら、忍が怒鳴ってきたようだが、無視して切った。

「『コンセプション覚醒召還！！』」

ケルベルスの姿に変身し、窓から飛び出す。

『【奔放なる双翼】展開』

翼型アーティファクトを召還し、勢いよく空を飛び上がる。

認識阻害も発動し、ジュエルシールドが発動した方角へと向かった。

14話 「管理局と死亡フラグと時々……」 (後書き)

KYの参戦は次回。

彼の運命はいかに？

それでは^^ノシ

15話 「魔王からは逃げられない（Byユーノ）」（前書き）

遅くなりましたが、投稿完了

魔王？

誰でしょうね？
w

15話 「魔王からは逃げられない（Byユーノ）」

月村邸―忍の私室―

「ふふふ、湊ったら。懲りてないのかしら？」

「そうは思えませんが？」

忍の呟きにノエルが反対する。

実際、もう懲り懲りだと実感している湊だった。

だが、このおn「誰が鬼ですって？」……………この美女には関係ない。

「そんなはず無いわ！ノエル、新しいコスチュームを買いに行くわよ！」

「……………畏まりました（湊さん、頑張ってください）」

この瞬間、湊に悪寒が走ったのは言うまでもないだろう。

魔法少女リリカルなのは―黒き魔爪― 始まります

15話 「魔王からは逃げられない（Byユーノ）」

Side クロノ・ハラオウン

アースラは第97管理外世界【地球】へと向かっている。

その途中、現地での魔力反応を感知し、映像を映すと、2組の魔導師達と樹の化け物が対峙していた。

樹の化け物は、ロストログアによって変異した物だろう。

「中心となっているロストログアのクラスはA+。無差別攻撃の特性を見せています」

「次元干渉型か、回収を急がないと……クロノ・ハラオウン執務官、出られる？」

「転移座標の特定は出来ています。命令があればいつでも」

【S2U】を展開し、準備万端だと艦長を見返す。

伊達に執務官はやっていないさ。

「それでは現地での戦闘行動の停止、ロストログアの回収及び両名からの事情聴取を」

「了解です、艦長」

命令を受け、転送ポートに立つ。

そして、現地に転移しようとしたが……………

「気をつけてね♪」

艦長がハンカチを振りながら送り出そうとしてくれる。

僕は、そんな艦長に苦笑いを浮かべているだろう。

「……………行って来ます」

母さん、もう少し場を弁えてくれないかなあ？

・ ・ ・ ・

転移終了と同時に、左右から白と黒のデバイスが迫ってきた。

（まずい！？）

2組の魔導師がぶつかり合う真ん中に転移してしまったのか、今にも僕は殴られかけている状況。

慌てて黒いデバイスをS2Uで受け止め、白いデバイスを手で受け止めた。

「ストップだ！ここでの戦闘行動は危険すぎる！」

動揺を隠し、無然と言い放つ。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおう」

「・・・・・・時空管理局」

木の陰に居るフェレットが呟いた。

（この淫獣め！）

いや、僕は何を言ってるんだ？

Side Out

Side フェイト・テストロッサ

「時空管理局執務官クロノ・ハラOWNだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

私と同じくらいの年齢だろう男の子が介入してきた。

しかも彼は、時空管理局の執務官。

並の魔道師ではないはず。

「まずは二人とも武器を引くんだ」

「……………」

油断無く見つめながら、地面に脚をつける。

下手に動かず、機会を窺ったほうがいい。

「このまま戦闘を続けるなら、っ!？」

突然、防御魔法を展開し、橙色の【フォトンランサー】を受け流した。

「フェイト、撤退するよ!」

アルフは牽制にとフォトンランサーを展開し、私を逃がそうとしてくれる。

けど、ジュエルシールドは諦められない。

急いで回収しようとジュエルシールドに手を伸ばすが、執務官の攻撃魔法が迫ってきていた。

（間に合わない!？）

シールドの展開が間に合わない距離に達していた。

思わず目を瞑り、来るだろう衝撃に身を固める。

「……………こういった展開にまた立ち会うなんてなあ」

「え?」

「怪我は無いか？」

私の前には黒い甲冑の、母さんに連れて来て欲しいと頼まれた人物。

「ケルベルス？」

「ああ」

ケルベルスが居たのだ。

S i d e O u t

S i d e 湊・レイリア

「・・・・・・・・・・こういつた展開にまた立ち会うなんてなあ」

夕方まで寝過ごし、急いで臨海公園に飛んで着てみれば、KYことクロノ・ハラウンが既に到着していた。

そしてアルフがフotonランサーを放ったのを確認し、速度を速めた。

この後、ジュエルシールドを回収しようとしたフェイトがクロノの魔法を受けて倒れるのだ。

あんまり管理局と関わりたくないが、見逃せない。

「っ！」

青い魔法を、左腕で強引に弾く。

弾かれた魔法は有らぬ方向へと飛んでいった。

「うわああああ!？」

「ユーノ君!？」

……何か聞こえたが、きっと気のせいだろう。

「……………こういつた展開にまた立ち会うなんてなあ」

「え？」

月村邸ではなのはを、今回はフェイトを。

なんとも都合のいいことで。

「怪我は無いか？」

恐らく受けたであろう、プレシアからの虐待に心が痛む。

だから、それ以外での怪我からは、ある程度護ってやらないとな。

「ケルベルス？」

「ああ」

フェイトは困惑しているようだ。

まあ、明確に敵対はしていないけれども、一度は回収を妨害しているんだ。

仕方ないことだろう。

「あんた、何しに来たんだい！」

フェイトの傍まで寄ってきていたアルフが怒鳴りながら質問してくる。

嫌われたものだよ、仕方ないけど。

「撤退するんだろう？ここは任せてフェイトと下がれ」

「な、なんであんたがそんな事するんだい！？」

「いいから、さっさといけ。それとも管理局に突き出されたほうがいいのか？」

「つく！？」

管理局の言葉に、アルフも顔を引き締めフェイトに視線を向ける。

フェイトはジュエルシードを諦められないようだが、それ以外にもありそうだ。

「……………後で会ってもらえますか？」

「あ、ああ、何処に行けばいい？」

突然フェイトから念話が入り、驚きながらも返事をした。

「遠見市にある○○○マンションに来てください」

「わかった、離脱してから向かわせてもらう」

しかし、なんの用があるんだ？

去っていくフェイトとアルフを見送りながら、そんな事を考えていた。

「逃がすか！」

クロノがフェイトを追おうとするが、立ちほだかる。

「つく、邪魔をするのか？公務執行妨害だぞ！」

なんてこと言って俺を睨みつけてくる。

「公務執行妨害？俺は知り合いの女の子が見知らぬ男に襲われて
いるから助けただけだが？」

「な！？誰が襲ったんだ、誰が！」

「お前」

「ふざけるな！」

顔を真っ赤にして反論してくるクロノに、指を指して答えてやった。

案の定、激昂して突っかかってきてくれる。

「……生前読んでいた二次創作で、よくクロノが弄られていたが、確かに楽しいわ。」

「と、そろそろフェイトも撤退出来ただろう。」

「さて、そろそろ帰るかな」

「待て、貴様を連行する！」

「いやいや、何の権限があるんだよ。子供に付き合ってもらえん」

「誰が子供だ！」

「お前」

「指を指すな！　っく、埒が明かない。強制的にでも連れて行く！」

S2Uを掲げ、魔力弾を放ってきた。

「いやいや、沸点低いぞクロノ。」

先程のように、腕で弾き返す。

だが、これで大義名分？　はできた。

正当防衛にでますかね。

Side Out

Side Others

その頃、なのは達は……

「大丈夫、ユーノ君？」

「なんとか大丈夫だよ、なのは」

「よかった」

飛んできた魔法に慌ててシールドを展開し防いだユーノ。

まさに間一髪のタイミングだったようだ。

なのはもそれに安心した様子。

「それじゃ、今からやろっか？」

「え、何を？」

「今回も逃げてたよね、ユーノ君？」

「そ、そんな!？」

ユーノは逃げ出した。

残念、回り込まれた。

「デイバイン！」

『Buster』

「ぎゃあああああ!？」

魔王からは逃げられない。

15話 「魔王からは逃げられない（Byユーノ）」（後書き）

最後のなのはとユーノの掛け合いがお馴染みになってきた。

おかしい、こんなはずでは………まあ、いいかw

それではへへノシ

16話 「VSクロノ」 (前書き)

どうか日曜日に更新。

神様、文才と執筆時間をください。

16話 「VSクロノ」

「藍、久々の魔導師戦だ。準備できてるか？」

『Yes, Master. いつでもいけます』

「よし、いくぞ！」

『All right, my master.』

魔法少女リリカルなのは―黒き魔爪― 始まります

16話 「VSクロノ」

Side 湊・レイリア

俺は【奔放なる双翼】を解除して、公園内を疾走していた。

後ろからは青い光弾が迫ってくる。

「ええい、いい加減に当たれ！」

「そら、当ててみる」

「スナイプショット！」

クロノの声に、青い光弾【ステインガースナイプ】が軌道を変えて襲ってくる。

跳躍して避けては距離を取る。

さっきからこれの繰り返しである。

時折【ステインガレイ】の牽制が飛んでくるが、脚元に作った魔力の足場を蹴って難なく避けてみせた。

クロノを見ると、疲れたような表情はしていない。

まあ、魔力運用が得意らしいから、それほど魔力は削れていないんだろう。

（まあ、そろそろ反撃しないとフェイトを待たせちゃうからな）

そう思い、地面に着地すると、クロノに向かい合う。

飛んでくるステインガースナイプに左手を向け、握り潰す。

手の中に若干衝撃を感じたが、大したことじゃない。

その光景にクロノは驚きながらも、こちらに話しかけてきた。

「……………大人しく捕まる気になったのか？」

「いや、人を待たせているんだ。そろそろ終わらせようと思ってな！」

「つく!?!」

言い終わると同時に、クロノに仕掛ける。

脚力を活かし、懷に潜り込んでボディীবローをお見舞いするが、シールドに阻まれてしまった。

が、それも一瞬の事。

瞬く間にシールドに輝が入り、1秒もしない内に破壊した。

しかし、その間にクロノは距離をとり、攻撃を逃れていた。

（驚いたな。伊達に猫姉妹ロッセとアリアから戦闘技術を教わっていないって訳か）

今の一撃は結構自身あったんだけどなあ。

ダメージ与えられなかったのはショックだ。

クロノを見ると、何故か口元が笑っているように見えるんだが？

・・・まさか！？

『魔力反応感知、バインドです！』

「デイレイドバインド！？」

「そうだ。ようやく掛かってくれた」

いやいや、こんなにあっさり引っかかってしまう俺の不甲斐無さには、呆れてしまう。

まあ、魔導師戦はこれで2度目だし、前回は戦闘とも言えないしなあ。

これからは気をつけないと。

へ・・・ふふふ、後で特訓ですね

いや、藍さん。

その笑い方、忍みたいで怖いんですけど？

S i d e O u t

S i d e リンディ・ハラオウン

クロノがケルベルスと呼ばれていた人物をバインドで拘束した。

その光景にアースラのクルー達は感嘆の声を漏らしていた。

（さすがはクロノ。私の息子ねえ♪）

って、いけないいけない。

仕事を済ませちゃわないとね。

「エイミィ、クロノに通信を繋いで頂戴」

「はい、艦長！」

程なくして、クロノと通信が開始された。

「お疲れ様、クロノ」

「済みません艦長。1人逃してしまいました」

「いいのよ。もう1人の娘と一緒にアースラに「勝った気になるのは早いんじゃないか？」……………え？」

通信越しに、クロノ以外の声と「バキイン！」という音が聞こえた。

別のモニターを見ると、バインドで拘束されていた人物がクロノを掴み上げていた。

まさか、こんな短時間でクロノのバインドを解いたの？

並の魔導師なら10分以上は掛かるはず。

これは少し不味いわね。

S i d e O u t

S i d e クロノ・ハラオウン

油断したつもりはなかった。

自分の中でも最高の強度でバインドを仕掛けたんだ。

だが、奴はそのバインドを簡単に破壊して、僕を掴み上げていた。

「つぐ、どうやってあのバインドから……」

「簡単だ。力尽くで破壊しただけだからな」

「な、なんて馬鹿力だ」

バインドを力だけで破壊するなんて、非常識にも程がある。

大人の力でもビクともしない上に、僕のバインドは強度を上げていたんだぞ。

「時間もないから、これで終わりにする」

「つぐ、がは!？」

掴んでいた手が離れた瞬間、強烈な回し蹴りを2発喰らわされた。

たまらず距離を取ろうとするが、動く前にパンチの連打が!？

辛うじて防御するが、何度も腕を打たれ、感覚がなくなっていく。

『C・ビートラッシュ』

「ぐあ!?!」

腹部に衝撃が走り、吹き飛ばされる。

吹き飛ぶ際に見えた相手の姿に、僕は蹴り飛ばされたことがわかった。

バリアジャケット越しなのに、腹の痛みが尋常ではなかった。

「ぐうう!?!」

「……………【トールの鉄槌】」

腹部のダメージに立ち上がれない僕を尻目に、奴はそう囁いた。

その瞬間、奴の左腕が変化を見せた。

鋭い爪を持った手はそのままに、腕が2倍以上にも大きくなったのだ。

恐らく、あれが奴のデバイスなのだろう。

その腕に脅威を感じ、如何にか体勢を立て直そうとするが……………

「そんな、バインドなんていつの間に!？」

突如現れたチェーンバインドによって、地面から身動きが取れなくなった。

急いで抵抗《レジスト》を開始するが、膨大な魔力で練り上げられたバインドは、直に解けそうになかった。

『アーティファクトブレイク・コード【トール・スマッシュ】』

先程聞こえた女の声が響き、奴は構えを取ったのを確認し、猶予が無いと判断し、この後の事など考えないで魔力を消費する。

だが、それでもバインドは解除できなかった。

急激な風圧を撒き散らしながら、空に舞い上がった奴は狙いを僕に定めると、急降下で僕へと向かって来ていた。

殺られる。

そう思った。

「待ってください!」

突然、空間モニターが現れ、艦長が止めに入ってくれた。

だが、奴の勢いは止まらなかった。

「トール・スマッシュ!!」

「!?!」

「やめて!!」

来るであろう衝撃を覚悟して、目を閉じた。

周囲がミシミシと凹むような衝撃音を聞きながら、痛みがなかった事に、少なからず感謝したかった。

そこで僕は思考を止めた。

S i d e O u t

S i d e 湊・レイリア

【トールの鉄槌】を元の腕――《永遠に続く慟哭》に戻す。

俺の拳は、クロノの顔のすぐ隣の地面を穿っていた。

さすがに直撃させるわけにいかず、地面を陥没させるに留めたのだ。
クロノは気絶しているようだ。

「・・・・・・・・どういふつもりですか？」

「無力化出来れば問題ない。これ以上は無意味だ」

リンディの質問に、無難な返答をした。

実際、バインドをかけた時点で撤退すれば良かったとも思っている。

正直やり過ぎた感は否めないが、後のまつりだろう。

深く考えたら負けだ。

「・・・・・・・・そうですか。では、お話を聞かせてもらえませんか？」

「悪いが先約がある。もし聴きたいのなら、あちらにいる娘も合わせて明日にしてみらおう」

フェイトを待たせるわけにもいかない。

かと言って、なのはとユーノだけにしてアースラに向かったら、あの娘達は何を言うかわからん。

明日に引き伸ばしたほうが無難だろう。

「・・・・・・・・わかりました。では明日、アースラにて「待て」はい？」

「なぜ、そちらに行かなければならない？ここで構わんだろう」

態々、敵地に行く馬鹿が何処にいますか？

いや、敵地は言いすぎかもしれないが、どこから検査されてるかわかったもんじゃない。

「わかりました。明日の夕方、そこで待っています」

「ああ、それでは執務官の回収を頼む」

そう言うのと、クロノは光に包まれて消えていった。

エイミィが既に行動していたんだろう。

「じゃあな」

最後にそう言ってその場を後にした。

・ ・ ・ ・ ・

フェイトとの合流場所に向かう際に思い出した。

「あ、なのはとユーノほっといったまんまだ」

S i d e
O u t

S i d e
O t h e r s

忘れられていた2人。

「私ってヒロイン——《主人公》なんだよね？」

「な、なのは？メタな発言はよしたほうが・ ・ ・ ・ ・」

「もう！どうしてこうなったの！」

『D i v i n e B u s t e r』

「それは八つ当たりいいいいいい!？」

毎度お馴染みな2人だったとき。

16話 「VSクロノ」 (後書き)

こんな感じに仕上がりました。

戦闘シーンって、やっぱり難しいですね。

これからも精進したいと思います。

それでは^^ノシ

17話 「うっかり発動」 (前書き)

更新完了

拙い文ですが、よろしければお付き合いください

それではどうぞ

17話 「うっかり発動」

〈マスター、迂闊過ぎですよ？〉

〈・・・・・・・・言わないでくれ、藍。俺だってそう思うよ〉

〈・・・・・・・・ふう〉

〈落胆された！？〉

魔法少女リリカルなのは――黒き魔爪―― 始まります

17話 「うっかり発動」

Side 湊・レイリア

臨海公園を離脱後、転移を繰り返した。

管理局のサーチャーを振り切るためだ。

そうして十数回目の転移で海鳴市に帰ってきた。

「……はあ、疲れた」

『お疲れ様です、マスター』

「ああ、藍もサポートお疲れ」

お互いに労いあう。

……こういうのはいいな、【相棒《パートナー》】って感じがして好きだ。

周囲を見渡し、誰も居ないことを確認。

「……よし、藍」

『Yes, Master. ……【ケルベルス】解除完了』

よし、フェイトと合流するか。

少し時間が掛かったから急がないとな。

「藍、フェイトとの合流地点までナビゲートを頼む」

『Y e s, M a s t e r. お任せ下さい』

さて、行くかな。

・ ・ ・ ・ ・

で、合流地点に着いたわけなんだが……

どう見ても、フェイトの住んでるはずのマンションでした、本当に
(r y

・ ・ ・ ・ ・ それにしてもフェイトさんや、無用心すぎませんか？

明確に敵対してはいないけど、素性の知れない相手をいきなり自宅に招くなんてさ。

「・ ・ ・ ・ ・ 行くか」

考えたところで答えは出ない。

とりあえず、これ以上待たせるのも悪いから、指定された部屋に向かうことにした。

S i d e O u t

S i d e アルフ

「ただいま」

「ただいま」

ケルベルスの奴に言われ、管理局から逃れたあたし達は、漸くアジトのマンションに着いた。

ジュエルシードの事は残念だったけど、管理局に捕まるより何倍もマシだ。

癪だけど、今回はアイツに感謝しないとねえ。

冷蔵庫から冷えたお茶をグラスに注ぎ、フェイトに持っていく。

「フェイト、お疲れ様。はい、冷たいお茶だよ」

「ありがとう、アルフ。アルフもお疲れ様」

ソファーに深く座って、あたしもお茶に手を着けた。

くうく、美味しいねえ。

動いた後の水分ってやっぱり美味しいよ。

・ ・ ・ ・ ・

暫くりビングで寛いでいると、フェイトが時計を気にしだした。

なんだかそわそわしてるみたいだけど、何なんだろうか？

気になったから聞いてみる。

「フェイト、どうしたんだい？そわそわしちやって」

「あ、ごめんね。実はここにケr「ピンポーン♪」・・・・・・・・」

「ん、誰だろうね？ちよつと見てくるよ」

話し出したフェイトを遮るようにインターホンが鳴った。

それにしても家に何の用だろうね？

お隣さんが回覧板を持って来たことはあったけど、今回もそれかねえ？

「はいはい、何方ですかっ？」

「ああ、アルフか。フェイトは居るか？」

玄関の外に居たのは白い髪の女だった。

あれ、こいつ何処かで見たような……あつ、温泉で一緒になった女だ！

「あんた、何で家に？」

「…………いや、フェイトに呼ばれたんだが？」

「フェイトが？」

なんでフェイトがこの女を？

って言うか、いつの間にそんな仲に？

「アルフ、誰だったの？」

「やあ、フェイト。さっきぶりだな」

「…………あれ、あなたは温泉に居た人？」

「「は？」」

あたしと白い髪の女の子の声が重なった。

え、フェイトが呼んだんじゃないのかい？

って知り合いですらない！？

「いやいやいや。さっき念話で言ったじゃないか」

「「え！？」」

「あ、しまった！」

念話って、こいつもしかして管理局か！？

慌ててあたしは魔力を右手に込めて殴りかかった。

決まった！と思った瞬間、あたしの右手は黒い手に捕まっていた。

この腕って、ケルベルスの……まさか、この女がケルベルス！？

『緊急同調終了。マスター、お怪我はありませんか？』

「ああ、助かった。……それにしても失敗したな」

「あ、あんた、ケルベルスなのかい？」

「・・・・・・・・ああ、そうだ」

あたしは目を見開いて驚いた。

フェイトも驚きで呆然としていた。

喋り方や雰囲気で、ケルベルスは男と思っていたんだ。

それがこんな、こんな美人の女だったなんて!?

あたしの勘――《本能》が外れた！

S i d e O u t

S i d e フェイト・テスタロッサ

「あ、あんた、ケルベルスなのかい？」

「・・・・・・・・ああ、そうだ」

まさか、ケルベルスが女の人だなんて思わなかった。

ちょっとショックだよ……………って、私は何を？

そ、それよりも！？

「とりあえず中に！？」

「あ、ああ。とりあえず落ち着け、フェイト」

「は、はい！？」

ス～ハ～ス～ハ～。

何とか落ち着いたけど、なんだか気恥ずかしい……………

とりあえず、さっき言ったようにリビングに案内することにした。

「……………」

「ケルベルス？」

「あゝ、そのだな」

「?..?..?」

どうしたんだろうか？

ケルベルスが何か言いよどんでるみたいだ。

「湊だ」

「え？」

「名前だよ。ケルベルスはあの姿の時の名前だから」

「湊？」

「そう、湊・レイリアだ。改めてよろしく」

「よ、よろしく！」

そっか、湊って言うんだ。

温泉の時は近くに居ると安心できたんだけど、名前を知った今も何故か安心できる。

・・・・・・本当にどうしてなんだろう？

わからない。

いや、今はそんな事よりも母さんの所に湊を連れて行かないと。

「それで、どんな用で呼んだんだ？」

「あのね、湊。私の母さんがあなたを呼んでるの。だから一緒に来て」

「…………マジで？」

あれ、湊がなんだか落ち込んでる？

どうしてだろう？

S i d e O u t

S i d e 湊・レイリア

やらかしてしまった。

まさかフェイト達に正体をばらしてしまうなんて。

きつと今の俺のステータスにはスキル【うっかり】が追加されたに違いない！

F a t eのヒロインの1人【遠〇凜】の持っている困ったスキル。

……………まったくもって嬉しくない！

あの爺、今度会ったら（ry

・
・
・
・
・
・
ふう、起きてしまったことは仕方ないか。

「・・・・・・」

「ケルベルス？」

「あゝ、そのだな」

「??:?」

知られてしまった以上、最低限は教えてやらないとな。

「湊だ」

「え？」

「名前だよ。ケルベルスはあの姿の時の名前だから」

「湊？」

「そう、湊・レイリアだ。改めてよろしく」

「よ、よろしく!」

ん、なんかフェイトのテンションが上がったか?

いや、気のせいだろう。

それにしても、俺を呼んだ理由って何なんだ?

「それで、どんな用で呼んだんだ?」

本題を聴くために切り出した。

「あのね、湊。私の母さんがあなたを呼んでるの。だから一緒に来て」

「…………マジで?」

え、プレシア・テストロッサが俺を呼んでる?

それって所謂、フラグ^{死亡} ってやつですね (ry

なんでさ!?

Side Out

Side Others

その後、湊は心此処に在らずの状態だった。

フェイトの誘いに、知らず頷いており、今はマンションの屋上に移動していた。

「開け、いざないの扉。時の庭園、テストロッサの主のもとへ」

「……………あれ？」

舞台はテストロッサの居城【時の庭園】へと移るのだった。

「あれ……!？」

Side Out

17話 「うっかり発動」 (後書き)

そんな訳で【うっかり】発動しました

これからも発動する可能性があります

それでは^^ノシ

18話 「プレシア・テストロッサ」

「やってきました、風雲たけし」どうしたの?」
「.」
「なんでもない」

「そう?」

うん、現実逃避したかっただけなんだ。

気を取り直して言ってみよう。

『やってきました、時の庭園!』

「.なん.だと.」

出会った頃と性格変わったよね、藍?

魔法少女リリカルなのは―黒き魔爪― 始まります

18話 「プレシア・テストロッサ」

Side 湊・レイリア

フェイトの転移魔法で、俺達3人は【時の庭園】へとやって来た。

さっきまでの俺を殴ってやりたい。

……いつまでも終わったことを引きずっていても仕方ないか。

「湊、案内するからついて来て」

「ほら、行くよ」

「ああ、分かった」

先行するフェイトとアルフについて、庭園内を歩く。

・ ・ ・ ・ ・

10分程歩くが、未だに何処の部屋にも入らない。

っていうか、庭園の中なんだが、通路がやたらと広い、さらに長い。同じ景色がずっと続くんだぞ？

正直、萎えるんですけど。

（目的地マダー？）

さらに5分ほど通路を歩き、視線の先には大きな扉が見えてきた。

パツと見ただけでも豪華そうな装飾の施された扉。

ここが目的地であってほしい。

「この扉の向こうで母さんが待ってるから」

よかった、会話も無かったから、また歩くの嫌だったんだ。

フェイトに促されて、扉に向かうとアルフが近づいてきた。

「……………まあ、いきなり撃たれないとは思うけど気を付けなよ？」

「アルフ？」

「忠告はしたからね」

フェイトに聞こえないぐらいの小声でそう言ってきた。

まあ、アルフの気持ちも分からないではないか。

フェイトに対するプレシアの仕打ちは行き過ぎだからな。

警戒するに越したことはないって考えは真っ先にくるだろう。

理解したことを頷いてアルフに伝え、俺は扉を潜った。

S i d e O u t

S i d e プレシア・テストロッサ

人形が約束通り、ケルベルスを連れて来た。

しかも、1日も経たずに連れて来た。

ふふふ、これはご褒美をあげないといけないかしら？

……まあ、いいわ。

とりあえず、今は目の前の女【ケルベルス】からよ。

「あなたがケルベルス？あの外見とは考えられないわねえ」

「・・・・・・・・」

何やら、苦虫を噛み潰したように顔を顰めた。

気にしていたのかしら？

「まずは自己紹介からかしら？私はプレシア・テストロッサ」

「・・・・・・・・ケルベルスだ」

「ケルベルス、あなたに聞きたい事があるわ。次元震が起きた時に現れた生物の事よ」

あの生物は次元震で発生した膨大な魔力を抑え、いえ、制御して産まれてきたように私は感じた。

あの魔力制御能力は、私の計画にはとても魅力的な物だ。

ジュエルシードの不安定な魔力を制御し、私の願いを叶えることが出来れば・・・・・・・・

「……………詳しい事は知らない。【マガツカミ】と呼ばれ、魔力を持つ生物を襲う。その程度だ」

「……………そう、残念ね」

【マガツカミ】……………ねえ。

まあいいわ、これも重要だけど本題じゃない。

「あなた、私に協力しなさい」

ケルベルスは【マガツカミ】を上回る制御能力を持っているはず。

人形のデバイスから映し出した映像で見たとき、私の直感がそう告げていた。

S i d e O u t

S i d e 湊・レイリア

「あなた、私に協力しなさい」

「…………汗がダクダクを流れているのが分かる。」

「だって、プレシアの誘いだよ？」

「管理局と敵対しないといけないんだぜ？」

「さっきのマガツカミの説明は、実際どうして現れたか分からないからまだいいんだが。」

「あなたの魔力制御能力はマガツカミと同等……………いえ、それ以上だと私は思ってるわ」

「……………そんなことは「私も大魔導師と言われた者よ？映像を見ればその能力の高さは分かるわ」……………」

「まずい、本当にまずい。」

「……………そういえば、あなた。管理局からフェイトを逃がしてくれたみたいね」

「はあ、なんで今その話が？」

「もし気に入ったなら、協力した報酬にあの子をあげるわ。今なら使い魔もついてくるわよ？」

「っ!？」

フェイト達を報酬だって!？

分かっていたけど、この女【プレシア・テストロッサ】は外道だ。

……っく、今ここで殴ってやりたい。

だけど、それをすればフェイトの待遇が今以上に悪化する可能性がある。

来る時に見えたフェイトの背中傷。

原作でも痛々しかったそれを実際に見て、どうにかしてやりたかった。

……協力するしかないか。

へ………よろしいのですか?<

へ………フェイトとアルフの為だ。今は納得しろ<

へ………Yes, Master.<

あの2人の為に、今は従うしかない。

「・・・・・・・・協力しよう」

「ふふふ、分かったわ。報酬も必ずあなたに払ってあげる」

「だが明日、管理局に会わなければならない。それは許可してもらおう」

「・・・・・・・・余計なことを話さないようにしなさい。さもなくば「分かっている」・・・・・・・・そう、ならいいわ」

それからジュエルシードの搜索なども協力するように言われた。

踵を返し、部屋を出る。

いつまでも、あの女の前になんか居たくなかった。

そして部屋を後にした俺は、合流する為にフェイトとアルフに念話を送った。

S i d e O u t

S i d e ア ル フ

時の庭園内の自室にあたしは戻ってきていた。

フェイトも今は、自分の部屋で休んでいる。

「それにしても………湊の奴、大丈夫かねえ」

鬼婆の部屋に入っていた湊。

あれから1時間は経っていた。

本当なら、得体の知れない湊を気にする必要なんて無かった。

だけど、何故だか気になってしまうのだ。

「……………なんでだろうねえ？」

なんだかモヤモヤするよ。

そう思っていた時、念話が聞こえた。

へフェイト、アルフ。こっちは終わったから迎えに来てくれ

噂をすれば何とやら、だっけか？

湊からの念話だった。

〈うん、すぐに行くよ〉

〈あいよ、待ってな〉

さて、行きますか。

・
・
・
・
・

フェイトと一緒に湊を迎えに行くと、湊の表情が苛立っているような顔をしていた。

鬼婆と何かあったんだろう。

「どうしたの、湊？」

フェイトも感じていたようで、湊に問いかけていた。

「……………いや、また長い通路を歩くと憂鬱だね」

そう答えた湊は、さっきまでの表情が嘘のように笑顔に変わっていた。

・
・
・
・
・
なんかおかしいね。

「ああ、2人に言っておくことがある」

「え、なに？」

「なんだい？」

「ジュエルシードの捜索に協力することになったんだ、よろしく」

「
・
・
・
・
・
ええ
ええ
ええ
ええ
ええ
ええ！？」

その言葉に、さっきの不信感は吹き飛ばされていた。

Side Out

18話

「プレシア・テストロッサ」

（後書き）

投稿完了

19話 「月村流のお話」 (前書き)

キヤラ崩壊気味？

駄目な方は戻るを推奨します

19話 「月村流のお話」

俺のジュエルシード探索参加に驚愕した2人が落ち着いてから、フ
エイトのマンションに戻ってきた。

その頃にはもう、夜の9時を回っていた。

流石にこれ以上遅くなると、忍に何を言われるかわからない。

「それじゃあ、2人とも。おやすみ」

「うん、おやすみ」

「おやすみ」

別れを済ませ、月村邸へと急いで向かった。

魔法少女リリカルなのは―黒き魔爪― 始まります

19話 「月村流のお話」

Side 月村 忍

ノエルからの報告で湊が帰ってきたと聴き、玄関で出迎えた。

「湊、お帰りなさ「ボタン」……………」

笑顔で迎えてあげると、湊は開いていた玄関のドアを閉めた。

……………いい度胸してるじゃない湊？

「ノエル、湊を捕まえて私の部屋に連れて来なさい」

「……………畏まりました」

「5分以内に連れて来なさい。じゃなきゃ、あなたも湊と一緒に受けさせるわよ？」

私の言葉を聴き、ノエルは大急ぎで玄関を抜け、湊を捜しに行った。

……………そんなに嫌なのかしら？

まあ、いいわ。

私も部屋に戻って準備を始めましょうか。

・ ・ ・ ・ ・

私室で用意していた物を見ると、廊下から何かを引き摺るような音が聞こえてきた。

・ ・ ・ ・ ・ 何の音かしら？

その音が私の部屋の前で止まる。

「湊さんをお連れしました」

声の主はノエルだった。

たまたま持っていたストップウォッチを見れば・ ・ ・ ・ ・ 4分15秒。

さすがはノエル、やるわね！

「ありがとうございます、ノエル。入ちなさい」

「はい、お嬢様」

ドアが開き入ってきたのはノエルは・・・・・・・・・・ガムテープで梱包されたダンボールから顔を出している湊（口にガムテープ）を引き摺っていた。

「ムグググ！？」（※どうしてこうなった！？）

・・・・・・・・あの短時間になにがあったのかしら？

Side Out

Side 湊・レイリア

玄関のドアを開けると、笑顔の忍が待っていた。

その背後に夜叉を垣間見た！と思った瞬間にはドアを閉めて逃げ出した。

その後、玄関の開く音に振り向くと、ノエルが飛び出して俺を追ってきているのがわかった。

・・・・・・・・あれ、ノエルの背後に毘門天的な方が見えたんだけ

ど、気のせいかな？

と、とにかく、逃げろ～～～！！

・ ・ ・ ・ ・

ノエルを振り切り、偶然見つけた某蛇の人御用達のスニーキングアイテムに身を潜めた。

ふふふ、これで大丈夫。

暫くこのまま待って、忍達が落ち着くのを待つとしよう。

うん、それがいい！」

（・・・・・・マスター。声に出てますよ？）

「・・・・・・そこに居ましたか」

「っは！？ぐほ！？」

声が聞こえた瞬間、スニーキングアイテムから飛び出そうとするが、その願いは叶わなかった。

移動できるよう下に下側を空けておいたのに、いつの間にか閉じられていたのだ！

「メイドの嗜みです」

・ ・ ・ ・ ・メイド、マジパネエw

ノエルが少しだけ空けてくれた上側から顔を出した瞬間、口をガムテープで塞がれた。

よく見るとダンボールはガムテープでしっかり梱包されていた・ ・ ・
・ ・ ・ご丁寧に3重で。

あ、あの、ノエルさん？

「さあ、逝きますよ」

「ムグググ！？」（※字が違わなかった!？）

俺の叫びも空しく、そのままズルズルと引き摺られて連行された。

Side Out

Side 月村 すずか

夕方、私が学校から帰ってくる前に湊さんは急に出掛けたらしい。

何か急用でも出来たのかな？

その湊さんが帰ってきたとファリンから教えてもらい、お姉ちゃんの部屋に向かっている。

なんでお姉ちゃんの部屋にいるのかな？

・ ・ ・ ・ ・

お姉ちゃんの部屋の前に着き、ノックをする。

「お姉ちゃん」

「ああ、すずか。入っていいわよ」

そう言われて部屋に入るとお姉ちゃんの他にノエルとファリン、そして・ ・ ・ ・ ・ 何故かメイド服を着ている湊さんがいた。

「えっと・ ・ ・ ・ ・ 湊さん？」

「・ ・ ・ ・ ・ 何も言わないでくれ、すずか」

「あ、あはははは」

「はははははは……はあ」

私がなんとも言えない笑い声を上げると、湊さんは渴いた声で笑った後、溜め息をついた。

「……そっか、今日の外出でお姉ちゃんに目を着けられたんだ。」

男の人がそんな格好させられれば、溜め息もつきなくなるよね？

「……あれ？でも今は女性の体だからいいのかな？」

「さあ、湊！次の衣装いってみようか！」

「次はこれにしましょうよ♪」（※手にはチャイナドレス）

「その……これなどいかがでしょうか？」（※手にはゴスロリ系）

「……せめてもっと普通の服にしてくれ」or z

あうう、湊さんの落ち込みようが著しいよう！？

え、ええっと、こんな時は何て言ってあげたらいいのかなあ？

「その………湊さんなら似合うと思いますよ?」

「ゴフ!？」

「え、ええええええ!?!湊さあああん!?!」

私の言葉を聴いた湊さんが、凄い勢いで倒れちゃった!

しかも口からは、何処か湊さんに似た白い物が出て、空に飛んでいこうとしている!?

「………さすが私の妹ね、すずか。見事に止めを刺したわ」

「さすがです、すずかちゃん!」

「そんな事無いよ、お姉ちゃん!?!ファリンまで!?!」

お姉ちゃんとファリンに抗議する。

私は湊さんを褒めたのに、酷いよ2人とも!

また反論しようとする、ノエルが神妙な声で………

「あの………湊さんの状態は危険なんじゃないでしょうか?」

と、語った。

「湊さん!？」

ノエルの言葉に、湊さんに目を向ける。

そして私の目に入ってきたのは……口から出ていた白い物が、神々しい光に照らされながら空に昇っていく光景だった。

「だ、駄目ええええ!？」

自分でも驚くほどの大声と速さで白い物を捕まえ、湊さんの口に詰め込んだ。

きつと、あのまま昇っていったら大変な事になった気がする。

これで、きつと大丈夫なはず。

「よし、湊の気が付いたらこれを着せましょうか」(※手にはナース服)

「えー、これにしましょうよ」(※手には旧スク水＋ネコミミ＆尻尾)

お姉ちゃんとファリンの声に反応したのか、湊さんの体がビクツツと震え・・・・・・・・また白い物が口から凄い勢いで逃げ出した!?

「湊さん、戻ってきて!?!」

私はその白い物を必死に追った。

そうして、どうにか捕まえて湊さんの口の中に戻した頃には、時計の針が12時を指そうとしていた。

・・・・・・・・今日はもう寝よう。

「お休みなさい、湊さん」

もう、お姉ちゃんに捕まっちゃ駄目だよ?

S i d e O u t

19話 「月村流のお話」 (後書き)

前日は普通の服を着せられたと思ってください
W

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4315m/>

魔法少女リリカルなのは † 黒き魔爪 †

2010年10月25日08時20分発行